

二〇一五年十二月

『河東記』訳注稿(三)

赤井益久 岡田充博 澤崎久和

第四話 葉靜能 (卷七十二・道術二)

【全文】

唐汝陽王好飲。終日不亂。客有至者。莫不留連旦夕①。時術士葉靜能常過焉。王彊之②酒。不可。曰。某有一生徒。酒量可爲王飲客矣。然雖侏儒。亦有過人者。明日使謁王。王試與之言也。明旦。有投刺曰。道士常持蒲③。王引入④。長二尺⑤。既坐。談胚渾至道。次三皇五帝。歷代興亡。天時人事。經傳子史。歷歷如指諸掌焉。王呿口不能對。既而以王意未洽。更咨話淺近諧戲之事。王則懽然。謂曰。觀師風度。亦常飲酒乎。持蒲曰。唯所命耳。王卽令左右行酒。已⑥數巡。持蒲曰。此

不足爲飲也。請移大器中。與王自挹而飲之。量止則已。不亦樂乎。王又如其言。命醇酎⑦數石。置大斛中。以巨觥取⑧而飲之。王飲中醺然⑨。而持蒲⑩固不擾。風韻轉高。良久。忽謂王曰。某止此一杯。醉矣。王曰。觀師量殊未可足。請更進之。持蒲曰。王不知度量有限乎。何必見彊⑪。乃復盡一杯。忽倒。視之則一大酒榼。受五斗焉。出河東記

【訓読】

唐の汝陽王、飲を好み、終日乱れず。客の至る者有れば、留連すること旦夕ならざるは莫し。時に術士葉靜能、常に過ぎる。王之に酒を彊ふるも、可かず。曰く、「某に一生徒有り。酒量王の飲客爲るべし。然して侏儒なりと雖も、亦た人

に過ぎたる者有り。明日王に謁せしめん。王試みに之と言へ」と。明旦、刺を投ずるもの有りて曰く、「道士常持蒲」と。王

引きて入らしむるに、長は二尺なり。既に坐するや、胚渾至

道を談じ、次いで三皇五帝、歴代の興亡、天時人事、経伝子

史、歴歴として諸を掌に指すが如し。王口を咭けて対ふる

能はず。既にして王の意の未だ洽らざるを以て、更に容

りて浅近諧戯の事を話す。王則ち懽然として、謂ひて曰く、「師

の風度を観るに、亦た常に酒を飲むか」と。持蒲曰く、「唯だ

命ずる所なるのみ」と。王即ち左右をして酒を行はしむ。已

に数巡するや、持蒲曰く、「此れ飲を為すに足らざるなり。請

ふ大器中に移さんことを。王と自ら抱みて之を飲み、量止ま

らば則ち已まん。亦た楽しからずや」と。王又た其の言の如

くす。醇醪数石を命じ、大斛の中に置かしめ、巨觥を以て取

りて之を飲む。王飲中に醺然たり。而して持蒲は固より擾れ

ず、風韻転た高し。良や久しくして、忽ち王に謂ひて曰く、「某

此の一杯に止めん、酔ひたり」と。王曰く、「師が量を観る

に殊ほ未だ足るべからず。請ふ更に之を進めん」と。持蒲曰

く、「王度量に限り有るを知らざるか。何ぞ必ずしも彊ひら

れんや」と。乃ち復た一杯を尽くし、忽ちにして倒る。之を

視れば則ち一大酒榼にして、五斗を受く。河東記に出づ。

【訳】

唐の汝陽王は酒が好きで、一日中飲んでも酔って乱れるということがなかった。来客があれば、引き留めて朝から晩まで飲み続けた。そのころ、葉静能という方術の士がいつも王のもとに出入りしていた。王はこれに酒を強いたが、葉は飲もうとしなかった。そして、「私に弟子が一人おります。酒に強く、王様のお相手を務めることができるでしょう。なりは小さいのですが、人に優れた才があります。明日、王様にお目通りさせましょう。王様、ためしにお話になってみてください」と言った。翌朝、名刺を差し出して面会を求める者があつた。名刺には、「道士常持蒲」とある。王が引き入れさせると、男は身長二尺余り。席に着くと、天地開闢の理から、三皇五帝、歴代王朝の興亡、天地の運行と人事の法則、経伝子史、百般の学を論じて明快なること、掌を指すがごとくであつた。王はぽかんと口を開けたきり、受け答えもできない。常持蒲は王の気持ちさがほぐれないのを見てとると、今度は身近で分かりやすく、面白い話題について語りだした。

王は喜んで、こう言った。「お見かけしたところ、平生、酒はおやりでしょうな」。持蒲は「御意のままに」と答えた。王はすぐに家来に命じて酒を注がせた。何度か杯が巡ると、持蒲が、「この杯では飲むに足りません。どうか大きな器に替えていただきたい。王様と手酌でやり、飲み足りたら止めることにしましたなら、なんと愉快ではありませんか」と言う。王はまた言う通りにして、美酒数石を大きな器に入れさせ、大杯を手にして酌み交わした。王は飲むうちにすっかり酔ってしまったが、持蒲は少しも乱れず、ますます高雅な風情である。しばらくすると、持蒲は突然王に、「それがし、この一杯でおしまいです。酔っ払いました」と言った。王が、「先生の酒量を見ますに、これではまだ足りないでしょう。どうかう一杯」と言うと、持蒲は、「王様は人の酒量には限度があることをご存知ないのでしょうか。そう無理強いされなくてもよいではありませんか」と答えた。そこでさらにまた一杯を飲みほすと、にわかには倒れ伏した。見れば、それは五斗も入るうかという大きな酒壺であった。『河東記』に出る。

【校記】

①「莫不留連旦夕」、会校本校記に「沈本作『必留連不得時去』。孫本作『必留連不得去』」とある。

②「彊之」、筆記本・四庫本、並びに「強之」に作る。

③「持蒲」、黄本・四庫本・筆記本、並びに「持滿」に作る。本条の他の四箇所の「持蒲」についても同じ。

④「引入」、会校本校記に「孫本・沈本作『遽引入』」とある。

⑤「二尺」、会校本は本文「二尺餘」とし、その後に、「其粗如甕、然而神彩美茂、音韻鏗□、王一見、其器之」二十

字を記す。校記に、「原無此二十字。現據孫本補。『□』

疑爲『鏘』字。『其』疑爲『甚』字之誤」とある。

⑥「已」、会校本校記に「孫本・沈本作『既』」とある。

⑦「醇醑」、四庫本、「醇醪」に作る。

⑧「取」、会校本校記に「孫本作『自取』」とある。

⑨「飲中醺然」、会校本校記に「孫本作『中飲酣然』」とある。

⑩「蒲」、会校本に「孫本作『蒲醺』」とある。

⑪「見彊」、四庫本、「見強」に作る。

【注】

○唐汝陽王 唐、睿宗の子憲の長子、李璿しんのこと。玄宗皇帝

の兄に当たたる。天寶九載（七五〇）卒。汝陽王に封ぜられたことは、『新唐書』卷八一・李璣伝に、「封汝陽王、歷太僕卿。

録」）に、玄宗が汝陽王を可愛がつて自ら音楽を授けたことが見える。

與賀知章・褚庭誨・梁涉等善（汝陽王に封ぜられ、太僕卿を歴たり。賀知章・褚庭誨・梁涉等と善し）」とある。汝陽は洛陽東南の地名。汝陽王李璣が酒を好んだことについては、杜甫の「飲中八仙歌」（『杜詩詳注』卷二、『全唐詩』卷二二六）に八仙の二人目として、「汝陽三斗始朝天、道逢麴車口流涎。恨不移封向酒泉（汝陽は三斗にして始めて天に朝し、道に麴車に逢ひて口に涎を流す。封を移して酒泉に向かはざるを恨む）」（汝陽王は三斗の酒を飲んでからようやく宮中に参内する。途中で麴を乗せた車に出会えば口からよだれを流し、酒泉に領地替え出来ないのを残念がる）と詠われる。「飲中八仙歌」の冒頭に挙げられるのは賀知章であるが、『旧唐書』卷九五、李璣の条にも「與賀知章・褚庭誨爲詩酒之交（賀知章・褚庭誨と詩酒の交りを為す）」とあり、賀知章らと詩酒の交わりがあったことが知られる。さらに、杜甫に「贈特進汝陽王二十二韻」（『杜詩詳注』卷一、『全唐詩』卷二二四）があり、これによれば汝陽王は杜甫のバトロンドでもあった。『太平広記』では卷二〇五・樂三・羯鼓「又玄宗」（出典は唐・南卓『羯鼓

○終日不亂 宋代の用例であるが、歐陽脩「河南府司録張君

墓表」（『歐陽文忠公集』卷二五）に、「其語言簡而有意、飲

酒終日不亂、雖醉未嘗頽墮（其の語言簡にして意有り、酒を

飲むこと終日なるも乱れず、酔ふと雖も未だ嘗て頽墮せず）」

とある。酒を飲んでも乱れないことを良しとするのは、早く

は『論語』郷党に「唯酒無量、不及亂（唯だ酒は量無く、乱

に及ばず）」とあるのが知られる。なお、「終日不」は「終

日不食」など、四字句として多用される。一例を挙げれば、『論

語』衛靈公に「吾嘗終日不食、終夜不寢、以思、無益、不如

學也（吾嘗て終日食らはず、終夜寝ねず、以て思ふ、益無し、

学ぶに如かざるなり）」とある。

○留連 引き留める。「留連」は、立ち去るにしのびず、その

まま居続ける意に用いられることが多いが、ここでは他動詞

としての用法。『太平広記』卷三五・神仙三五「馮大亮」（出

典は前蜀・杜光庭『仙伝拾遺』）に、「馮大亮者、導江人也。

家貧好道、亦無所修習。每道士方術之人過其門、必留連延接

（馮大亮は、導江の人なり。家貧しく道を好むも、亦た修習

する所無し。道士方術の人の其の門を過ぎる毎に、必ず留連して延接す」とある。会校本校記に、沈本は「必留連不得時去」に、孫本は「必留連不得去」に作るとあるのは、それぞれ「必ず留連して時に去るを得ざらしむ」、「必ず留連して去るを得ざらしむ」と読むものと解される。

○術士 方術・道術の士。類語に、方士・道士・道流等があり、それぞれ『太平広記』に多くの用例が見える。『河東記』では「呂群」（『太平広記』巻一四四・微応一〇「人臣答徴」）に、「群意謂術士厭勝之所（群が意謂へらく術士の厭勝の所ならんと）」とある。方術・道術、方士・道士の意味については、酒井忠夫・福井文雅「道教とは何か」の五「道術」と「道士」（『道教1』所収、平河出版社、一九八三年）参照。

○葉靜能 唐、中宗・玄宗頃の人。国子祭酒に任じられ、符術をよくした（『旧唐書』巻五一・中宗韋庶人、神龍四年条）。

『太平広記』巻五〇・神仙五〇「高岳嫁女」（出典は唐・李玫『纂異記』）に、西王母が葉靜能を召して玄宗の頃のことを歌わせたことを記す。同じく、巻四五〇・狐四「王苞」（出典は唐・戴孚『広異記』）には、葉靜能が符の力によって、婦人に化けた野狐の正体をあばく話が見え、巻四七〇・水族七・

水族為人「李鵬」（出典は唐・李伉『独異志』）には、羅浮山にいた道士葉靜能が玄宗の急なお召しに応じた話が見える。

また、『唐書』巻五九・芸文志・道家類・神仙に、「葉靜能太上北帝靈文三卷」が録される。『宋史』巻二〇五・芸文・神仙には、「大易誌圖參同經一卷」が録され、その注に「玄宗與葉靜能一行答問語」とある。一方、『太平広記』巻三〇〇・神一〇「葉淨能」、巻三八七・悟前生一「岐王範」（出典は共に『広異記』）には葉靜能と二字違いの葉淨能なる道士が登場する。葉淨能の名は敦煌変文に「葉淨能詩」があることによって知られ、その中の道術に関するさまざまな逸話には本話と同じ酒壺に化する道士の話が含まれる（項楚『敦煌変文選注（増訂本）上』四四九頁以下、中華書局、二〇〇六年）。さらにまた、中宗や玄宗に仕えた著名な道士に葉法善（六一四〜七二〇）がおり、『旧唐書』巻一九一、『新唐書』巻二〇四に伝があるほか、『太平広記』にも多くの逸話を伝えているが、このうち巻二六・神仙二六「葉法善」には本話と同じく酒壺に化する道士の話が登場する。以上の葉靜能・葉淨能・葉法善三者は、姓名・人物像の類似していることや共に本話に関わるストーリーを含むことから、相互に関係していることは間違いない。

ない（【参考】参照）。遊佐昇「葉法善と葉浄能―唐代道教の側面―」（『日本中国学会報』第三五集、一九八三年。後に同氏『唐代社会と道教』所収、東方書店、二〇一五年）は、葉浄能ないし葉浄能に関する逸話は葉法善の事跡を借りて生み出されたものではないかとする。張志哲主編『道教文化辞典』（江蘇古籍出版社、一九九四年）は「葉浄能は即ち葉法善」（九八三頁「葉浄能話」とするが、新旧唐書にはそれぞれについて記載が見られることなどから、なお検討が必要と思われる。なお、張鴻勛「敦煌話本《葉浄能詩》考弁」（『敦煌學論集』所収、甘肅人民出版社、一九八五年）に、酒壺に化する道士の話しの出処を『太平広記』等から指摘する。

○生徒 門弟。『後漢書』卷六〇上・馬融列伝に、「常坐高堂、施絳紗帳、前授生徒、後列女樂、弟子以次相傳、鮮有入其室者（常に高堂に坐し、絳紗の帳を施し、前には生徒に授け、後には女樂を列し、弟子次を以て相ひ伝ふるも、其の室に入る者有ること鮮なし）」とある。

○酒量 『太平広記』卷二三三に「酒量」の項があり、山濤等四人の酒豪の逸話を載せる。「山濤」の条に「山濤字巨源、飲酒量至八斗。武帝欲試之、使人私默以記之、至量而醉（山

濤、字は巨源、酒を飲むに量は八斗に至る。武帝 之を試みんと欲し、人をして私かに黙して以て之を記さしむるに、量に至りて酔ふ）」（出典は『晋書』）とあり、酒豪にも限度となる酒量があり、それを越えると「酔」うとする。本話の後文に、「某止此一杯、酔矣」とあるのは、まさに自分の酒量が限度に達したことを指して言う。なお、詩における酒量表現に関しては、高橋良行「李白の飲酒詩における酒量表現について―杜甫・白居易と比較しつつ―」（『松浦友久博士追悼記念中国古典文学論集』研文出版、二〇〇六年）が参照される。

○飲客 酒客。酒徒。沈約「七賢論」に「劉伶酒性既深、子期又是飲客（劉伶 酒性既に深く、子期も又た是れ飲客なり）」（『芸文類聚』卷三七・人部・隱逸下）とある。劉伶については後文の「受五斗」の注参照。子期は竹林の七賢の一人、向秀の字。白居易に、「感櫻桃花因招飲客（桜桃花に感じ因りて飲客を招く）」（『白氏文集』卷一八、『全唐詩』卷四四一）と題する詩がある。

○然雖 二字で、「くではあるが」の意。「雖然」（然りと雖も）に同じ。『太平広記』卷一五二・定数七「鄭德璘」（出典は唐・裴鉞『伝奇』）に「德璘因窺見之甚悦、遂以紅綃一尺、上題

詩曰……女因收得、吟翫久之。然雖諷讀、即不能曉其義（徳璘因りて窺ひて之を見、甚だ悦ぶ。遂に紅綃一尺を以て、上に詩を題して曰く……女因りて収め得、吟翫すること之を久しうす。然して諷読すると雖も、即ち其の義を曉ること能はず）とある。

○侏儒 こびと。量韻の語。『礼記』王制に、「瘠・聾・跛・瘖・斷者・侏儒・百工、各以其器食之（瘠・聾・跛・瘖・斷者・侏儒・百工、各おの其の器を以て之を食らふ）」とあり、鄭注に「侏儒、短人也」とある。『史記』卷一二六・滑稽列伝に優旃という道化（俳優・優倡）が登場し、侏儒で冗談がうまく、しかも言うことは大道に適っていた、という。侏儒はしばしば道化役であり、滑稽な言動によつて皇帝を喜ばせながら物事の道理を説き、その過ちを諷める役割を担う。『太平広記』では卷二五〇・詠諧六「鄧玄挺」（出典は唐・侯白『啓顏録』）に、「兵部侍郎韋慎形容極短。時人弄爲侏儒（兵部侍郎韋慎形容極めて短なり。時人弄して侏儒と為す）」とある。

○過人 才知などにおいて、常人より優れていること。陸昕等主編『白話太平広記』（北京燕山出版社）の訳では、人に優れるのは「酒量」であるが、後文に見えるように、常持蒲が

古今の歴史や学問について縦横無尽に論じる才を持つことを踏まえるであろう。

○投刺 名刺を差し出して面会を求める。「刺」は名刺。『河東記』では「柳渢」（『太平広記』卷三〇八・神一八）に、「至陽朔縣南六十里、方博於舟中、忽推去博局、起離席、以手接一物。初視之。若有人投刺者（陽朔縣の南六十里に至り、方に舟中に博するに、忽ち博局を推去し、起ちて席を離れ、手を以て一物を接す。初め之を視るに、人の刺を投ずる者有るが若し）」とある。

○常持蒲 「常持蒲」の名は、『太平広記』ではこの条にのみ見える。『太平御覽』卷七〇九・服用部・薦席に引く『東觀漢記』（漢・劉珍等撰）に「郭丹師事公孫昌、敬重、常持蒲編席。人異之（郭丹公孫昌に師事し、敬重して、常に蒲編の席を持す。人之を異とす）」とあり、郭丹が相手に敬意を表すために、常に蒲（植物のガマ）で編んだ席（むしろ）を持っていたと伝える。席は人と話すときに用いるものであり、これによつて座談の相手に対する敬意を示す。本話に見える「常持蒲」という名がこれを踏まえているとすれば、汝陽王の関心に合わせて自在に談論する人物にふさわしい命名ということにな

る。なお、呉樹平『東觀漢記校注』（中州古籍出版社、一九八七年）の注に、『常持蒲編席、人異之』。此二句聚珍本作『常待重編席、顯異之』。按『常』與『嘗』字通。古人席地而坐、蒲席厚軟、『持蒲編席』、表示敬重。『重編席』、即雙層的席子。用這種席子相待、也是敬重的表示」とあり、この箇所には異文があることが知られるが、「蒲」でできた「席」を用いることが相手に対する敬意を表すことは変わらない。

一方、常持蒲の「蒲」を黄本・四庫本・筆記本では「滿」に作る。「常持滿」は宋代の類書に抄録される本話にも見える。『白孔六帖』卷一五・造酒「常持滿」に、「河東記、汝陽王璵飲葉靜能。葉曰、有一生徒、能飲。當令來謁。翌日有通謁者曰、常持滿。見之侏儒也。談胚渾之道、飲以五斗、忽醉倒、乃瓮也（河東記に、汝陽王璵 葉靜能に飲ましむ。葉曰く、「一生徒有り、能く飲む。当に來たりて謁せしむべし」と。翌日謁を通ずる者有りて曰く、「常持滿」と。之を見るに侏儒なり。胚渾の道を談じ、飲むに五斗を以てして、忽ち酔ひて倒るれば、乃ち瓮なり）」とある。これとほぼ同一文が、北宋・曾慥『類說』卷四五（『三水小牘』『道士常持滿』）、同卷五〇（『拾遺類說』『道士常持滿』）、宋・闕名『錦繡万花谷』前集卷三五

（酒「進士常持滿」、宋・陳葆光『三洞群仙錄』卷三（俱鳳闌茸持滿侏儒）、下つては明・陶珽輯『重校說郛』卷六〇（『河東記』『葉淨能』）、清・陳元龍『格致鏡原』卷五二（日用器物類・甕「河東記」などにも見えるが、いずれも「常持滿」と表記する。「常持滿」であれば、「常に滿を持す」と読むことができる。「持滿」は酒が杯に滿ちて溢れようとするのを持ちこたえる意となるから、これも後文の、限度を越えた一杯を飲んだために倒れ臥してしまった、という展開と符合する。ところで、酒が常に器に滿ちるということについて、『周礼』天官冢宰第一「酒正」の鄭玄注に「常滿尊」（「尊」は「樽」）とあり、疏に「言益之故常滿（言ふところは之を益すが故に常に滿つるなり）」とある。「常滿尊」は酒樽が常に酒で滿ちていることを言い、また酒樽の名ともなった。『芸文類聚』卷七三・雜器物部・樽に、劉宋・何偃「常滿樽銘」があり、その銘文に「斟酌賦受、不踰其量（賦受を斟酌して、其の量を踰えず）」とある。また、漢の東方朔述と伝える『海内十洲記』『鳳麟州在西海』に、周の穆王の時に西国から「昆吾割玉刀」と「夜光常滿杯」とを献ずる者が有り、このうち「常滿杯」は「三升」を受ける「白玉之精」であり、夜に中庭に出して

おくと、液が杯中に満ちたという。『類説』巻五九・文房四譜の「蓮子盃」の条に、「周穆王時有益名常滿（周の穆王の時盃有りて常滿と名づく）」とあるのはこれに拠っている。「榼」・「瓮」・「甕」・「杯」・「尊」・「樽」という違いはあるが、飲酒に關して早くから「持滿」という語が用いられていたことは注目される。「常持滿」と「常持滿」とは「滿」と「滿」との字形の類似から来る混同と見られるが、本話後段の展開と、宋代類書における表記が等しく「常持滿」であることとを勘案すると、「常持滿」が本来であつたと考えられる。

○長二尺 「長」は身長。唐代の一尺は、約三一・一センチ。この道士が侏儒であると設定される理由は、のちに明かされるように、その正体が酒壺であることによる。会校本は孫本によつて「其粗如甕、然而神彩美茂、音韻鏗□（鏘）、王一見、其（甚）器之（其の粗なること甕の如く、然して神彩美茂にして、音韻鏗鏘なり、王一見して、甚だ之を器とす）」（「鏘」「甚」は会校本校記に拠る）二十字を補う。

○談胚渾至道 天地開闢のことわりについて論ずる。「胚渾」は天地が混沌としてなお形をなさない状態。郭璞「江賦」に「類胚渾之未凝、象太極之構天（胚渾の未だ凝らざるに類し、

太極の天を構ふるに象たり）」（『文選』卷二二、「胚」は「胚」に同じ）とあり、李善注に「言雲氣杳冥、似胚胎渾混尚未凝結（言ふところは雲氣杳冥にして、胚胎渾混として尚ほ未だ凝結せざるに似たるなり）」と、李周翰注に「胚渾、渾沌也。太極、生天地者也（胚渾は、渾沌なり。太極は、天地を生ずる者なり）」とある。「至道」はもつともすぐれた道理。常持滿が天地開闢以来の歴史について滔滔と語るのは、その正体が酒壺であり、かつ酒が太古以来の歴史を有することによる。【参考】参照。

○三皇五帝 太古の伝説上の帝王。三皇を伏羲・女媧・神農とし、五帝を黄帝・顓頊・帝嚳・堯・舜とするなど、諸説がある。

○天時人事 天地運行の法則と人間世界の森羅万象。顔之推『顔氏家訓』勉学第八に、「上明天時、下該人事、用此致卿相者多矣（上は天の時を明らかにし、下は人の事を該ね、此を用て卿相を致す者多し）」とある。また、『東觀漢記』卷一に「天時人事已可知矣（天時人事已に知るべし）」と、三国呉・韋昭「国語解序」に「天時人事、逆順之數（天時人事、逆順の數）」（『全上古三代秦漢三國六朝文』全三國文・卷七一）と

あり、唐詩においても杜甫「小至」に、「天時人事日相催、冬至陽生春又來（天時人事日に相ひ催し、冬至陽生じて春又た來たる）」（『杜詩詳注』卷一八、『全唐詩』卷二二一）とあるなど、四字句としても散見する。

○**經傳子史** 「經」は經書。儒教の重要經典。「傳」は「經」に対する注解。「子」は諸子の書。思想書。「史」は歴史書。合わせて、主要な学問分野のすべてを指す。

○**歴歴** 歴然として明らかなさま。『河東記』では「辛察」（同卷三八五・再生一一）に「歴歴如在目前（歴歴として目前に在るが如し）」とあるなど、計四例が見える。

○**如指諸掌** きわめて容易であることの喩え。『礼記』仲尼燕居に、「子曰、明乎郊社之義、嘗禘之禮、治國其如指諸掌而已乎（子曰く、郊社の義、嘗禘の礼に明らかるときは、國を治むること其れ諸を掌に指すが如きのみなるか）」とあり、鄭注に、「治國指諸掌、言易知也（國を治め諸を掌に指すとは、知り易きを言ふなり）」とある。『太平広記』ではいま一例、卷二九・神仙二九「姚泓」（出典は唐・盧肇『逸史』）に、「仍爲僧陳晉宋歷代之事、如指諸掌。更有史氏闕而不書者、泓悉備言之（仍りて僧の爲に晋宋歷代の事を陳ぶるに、諸を掌に

指すが如し。更に史氏闕きて書せざる者有りて、泓悉く備に之を言ふ）」とある。

○**呿** 口を開ける。音は「キョ」。『莊子』秋水篇に「公孫龍口呿而不合、舌舉而不下、乃逸而走（公孫龍口呿ひらきて合はず、舌挙がりて下らず、乃ち逸して走る）」（公孫龍はたまげて開いた口がふさがらず、舌がひきつたまま逃げ去った）とある。

○**洽** やわらぐ、うちとける。『河東記』では「崔紹」（『太平広記』卷三八五・再生一一）に、「紹洪復累世通舊、情愛頗洽（紹と洪とは復た累世旧を通じ、情愛頗る洽やはらぐ）」とある。

○**淺近諧戲之事** 身近でこっけいな話題。「淺近」は淺薄・卑近。魏・嵇康「聲無哀樂論」に、「若流俗淺近、則聲不足悅、又非所歡也（若し流俗淺近なれば、則ち声悦ぶに足らず、又た歡ぶ所に非ざるなり）」とある。「諧戲」は諧謔・戲謔。「諧」はおどけたさま。『太平広記』卷二五二・談諧八「俳優人」（出典は唐・吳兢『唐闕史』）に「唐咸通中、俳優人李可及滑稽諧戲、獨出輩流（唐の咸通中、俳優人李可及滑稽諧戲にして、独り輩流より出づ）」とある。

○**懽然** よろこぶ。「懽」は「歡」に同じ。漢・王子淵「聖主得賢臣頌」に、「故聖主必待賢臣而弘功業、俊士亦俟明主以顯

其徳。上下俱欲、懽然交欣（故に聖主は必ず賢臣を待ちて功業を弘め、俊士も亦明主を俟ちて以て其の徳を顕す。上下は欲を俱にし、懽然として欣^{よろこび}を交ふ」（『文選』巻四七）とある。

○風度 優れた風采・態度。『太平広記』では巻三三六・鬼二一「常夷」（出典は唐・戴孚『広異記』）に「秀才著角巾葛單衣曳履。可年五十許、風度閑和、雅有清致（秀才 角巾と葛の単衣を著し履を曳く。年五十許^{ばかり}りなるべく、風度閑和にして、雅にして清致有り）」とある。

○行酒已數巡 「行酒」は一座の者に順に酒をつぐこと。「巡」は酒席の客に酒が一巡りつがれること。酒宴においては、一座の者が順に酒を飲む習慣があつた。唐代における「行酒」については、石田幹之助「唐代燕飲小景」（『増訂長安の春』東洋文庫所収）に指摘がある。本訳注稿の第八話「獨孤遐叔」の注「舉金爵」参照。『太平広記』から例を挙げれば、巻一三・神仙一三「成仙公」（出典は晋・葛洪『神仙伝』）に、「至年初元會之日、三百餘人、令先生行酒。酒巡偏訖、先生忽以杯酒向東南嚔之。衆客愕然怪之（年初元會の日に至り、三百余人、先生をして行酒せしむ。酒巡ること偏く訖^をはり、先生忽

ち杯酒を以て東南に向かひて之に嚔す。衆客愕然として之を怪しむ）」とあり、巻一九三・豪俠一「車中女子」（出典は唐・皇甫氏『原化記』）に酒宴の情景を描写して、「又有十餘後生皆衣服輕新、各設拜、列坐於客之下。陳以品味、饌至精潔。飲酒數巡、至女子、執杯顧問客（又十余の後生有り皆衣服輕新にして、各おの拝を設け、客の下に列坐す。陳^のぶるに品味を以てし、饌は精潔に至る。酒を飲むこと數巡、女子に至り、杯を執りて顧みて客に問ふ）」とある。

○量止則已 酒量が限度に達すれば、そこで飲むのをやめる。先に「酒量」の項の注にあげた『太平広記』巻二二三の山濤に関する逸話は『晋書』卷四三・山濤伝に出るのであるが、『太平広記』と『晋書』とは文字に若干の異同がある。いま『晋書』から引けば、「濤飲酒至八斗方醉。帝欲試之、乃以酒八斗飲濤。而密益其酒、濤極本量而止（濤酒を飲むに八斗に至りて方に酔ふ。帝之を試みんと欲し、乃ち酒八斗を以て濤に飲ましむ。而して密かに其の酒を益すに、濤本量を極めて止む）」とあり、山濤は自分本来の酒量八斗に達すると飲むのを止めたと言う。ここも同様の意。

○不亦樂乎 なんと楽しいことではないか。『論語』学而に「有

朋自遠方來、不亦樂乎（朋有り遠方自り來たる、亦た樂しからずや）」とあるのによる。

○醇酎數石 「醇」はまじりけのない酒。これに対して「酎」は酒を地に注いで神を祭る意の動詞として用いられる語である。四庫本は「酎」を「醪」に作る。「醪」は濁り酒。「醇酎」ならば『太平広記』に六例を数える。またもしこれが「酎」と字形の類似する「酎」（何度も醸した芳醇な酒）であれば意味の上でよく通じ、「醇酎」は『太平広記』に四例を存する。

早くには『文選』卷六所収、左思「魏都賦」に「醇酎中山、流湏千日（醇酎は中山、流湏すること千日なり）」（李善注に見える「千日酒」の故事）と見える。「醇酎」は「醇酎」である可能性がある。いずれにしても、上等の酒の意。

○數石 「石」は量の単位。斗の十倍で、唐代の一斗は六リットル弱。『芸文類聚』卷七二・食物部・酒に、「漢書曰：于定國飲酒、至數石不亂、飲益精明（漢書に曰く：于定國酒を飲むに、數石に至るも乱れず、飲みて益ます精明なり）」とある。『太平広記』では卷二八・神仙二八「郝鑑」（出典は唐・牛肅『記聞』）に、「醇酒常有數石（醇酒常に數石有り）」とある。

○大斛 大きなます。「斛」は量の単位で、斗の十倍に当たるが、ここではますそのもの。

○巨觥 大きな杯。「觥」は兕牛（水牛に似て角が一本の獣）の角を切つて杯としたもの。唐詩や『太平広記』にも頻出する。『太平広記』卷一八三・貢奉六「張曙」（出典は五代・王定保『唐摭言』）に「會夜飲、崔以巨觥飲張、張推辭再三（夜飲に會し、崔は巨觥を以て張に飲ましむるも、張推辭すること再三なり）」とある。

○醺然 酔った様子。『太平広記』卷三〇・神仙三〇「張果」（出典は『明皇雜錄』、また『宣室志』『統神仙伝』）に「玄宗命進謹斟賜果。果遂舉飲、盡三卮、醺然有醉色（玄宗命じて謹斟を進め果に賜ふ。果遂に挙げて飲み、三卮を尽くすに、醺然として酔色有り）」とある。

○風韻 風雅なおもむき。風度・韻致。しばしば人物について言う。『太平広記』卷九四・異僧八「玄覽」（出典は唐・段成式『酉陽雜俎』）に「唐大曆末、禪師玄覽住荊州陟胝寺。道高有風韻、人不可得而親（唐の大曆の末、禪師玄覽 荊州の陟胝寺に住まふ。道高くして風韻有り、人得て親しむべからず）」とある。【参考】参照。

○殊未可足 まったくまだ足りない。「殊未」は、まったくまだくしていない。早くは前漢・蘇武の作とされる「詩四首」其四（『文選』卷二九）に「嘉會難兩遇、懽樂殊未央（嘉会 兩たびは遇ひ難し、懽樂 殊は未だ央きず）」とある。『太平広記』では卷一一七・報応一六・陰徳「裴度」（出典は五代・王定保『唐摭言』）に、「郎君形神、稍異於人、不入相。若不至貴、即當餓死。今則殊未見貴處。可別日垂訪、爲君細看（郎君の形神、稍か人に異なりて、相に入らず。若し貴きに至らずんば、即ち当に餓死すべし。今則ち殊は未だ貴處を見ず。別日に垂訪すべし、君が為に細やかに看ん）」とある。

○酒榼 さかつぼ。「榼」は酒器の一種で、携帯にも用いられた。『文選』卷四七・劉伶「酒德頌」に「動則挈榼提壺（動もすれば則ち榼を挈し壺を提す）」とあり、李善注に「説文曰、榼、酒器也（説文に曰く、榼は、酒器なり）」とある。白居易の「晚春酒醒尋夢得」（『白氏文集』卷三三、『全唐詩』卷四五六）に「還攜小蠻去、試覓老劉看（還た小蛮を携へ去り、試みに老劉を覓めて看ん）」とあり、その自注に「小蠻、酒榼名也（小蛮は、酒榼の名なり）」とある。

○受五斗 五斗の酒が入る。「受」は、盛る、収容する意。「五

斗」という酒量については、『世説新語』任誕篇に、大酒飲み劉伶の言として、「天生劉伶、以酒爲名。一飲一斛、五斗解醒。婦人之言、慎不可聽（天 劉伶を生み、酒を以て名を為さしむ。一飲一斛、五斗にして醒を解く。婦人の言、慎んで聴くべからず）」とあるのが知られ、また初唐の王績に「五斗先生傳」（『新唐書』卷一九六・王績伝）があり、「常一飲五斗、因以爲號焉（常に一飲五斗、因りて以て号と為す）」と言う。

【参考】

『太平広記』には、「葉靜能」の類話がいくつかある。まず、卷三〇・神仙三〇「張果」の中の一段。張果は盛唐頃の著名な道士で、『旧唐書』卷一九一・方伎、『新唐書』卷二〇四・方伎に伝がある。

玄宗が道士の張果に酒を賜ったところ、張果は、「私は飲んでも二升を過ぎません。弟子に一斗飲めるものがおります」と言う。玄宗が召し出させたところ、突然小柄な道士が軒先から飛び降りてきた。年の頃は十六七。容姿に優れ、風雅な人柄である。会ってみると、弁舌爽やかで、礼儀正しい。玄

宗が酒を賜うと、一斗を飲んでなお辞退しない。張果が止めて、「これ以上賜うことはできません。度を過ぎればかならず

間違いを犯して笑われます」と言った。玄宗がなおも強いて酒を賜ったところ、頭のでっぺんから酒が湧き出し、ために

冠が地に落ちたとみるや、化して酒壺（榼）の蓋となった。

玄宗や妃はみな驚き笑い出した。見ればすでに道士の姿はなく、そこにはただ、一斗も入ろうかという金の酒壺があるのみであった。仔細に調べたところ、それはなんと宮中の集賢院の酒壺であった。（出典は『明皇雜錄』、また『宣室志』、『続神仙伝』）

右の一段は、以下の点において、「葉靜能」ときわめてよく似ている。

① 道士が貴人から勧められた酒を辞退し、代わりに酒

飲みの弟子を遣わす。

② 弟子は小柄だが、風雅で弁舌爽やか。

③ 弟子は大酒を飲むが、酒量の限度を越すと倒れ伏し、酒器に変化する。

④ 周囲を驚かす。

張果と同時代の葉法善も『旧唐書』巻一九一に伝がある著

名な道士であり、『太平広記』巻二六・神仙二六「葉法善」に次のような一段がある。

燕国公張説が道観に葉法善を訪ねた。葉法善が酒を出したので、張説が「ほかに客はおられぬようですが」と言うと、「麴処士なるものがおります。久しく山林に隠れ住み、まじめで朴訥ですが、すこぶる酒が好きで、大酒を飲みます」とのこと。張説が招きたいと言うと、すぐにやってきた。背丈は三尺に満たないが、腰回りは太い。席に着かせると、恭しく礼をするさまはまことに朴訥である。酒が来て一杯また一杯と飲み干すが、顔色は少しも変わらない。張説が帰ると、葉法善はにわかに剣を抜き、麴生に向かつて、「高邁な議論（高談廣論）もなしに、酒ばかりくらいおつて。この用なしが」と叱りつけるや切ってしまった。なんとそれは大きな酒壺（榼）であった。（出典は唐・薛用弱『集異記』及び前蜀・杜光庭『仙伝拾遺』）

麴処士については、『太平広記』巻三六八・精怪一・雜器用「麴秀才」（出典は唐・鄭棨『開天伝信記』）にも登場する。

ここでは、麴秀才は年二十ばかりの太った色白の書生で、葉法善の客人と議論するや古今のためしを引いて舌鋒鋭く論じ、

一座の者を驚かせたが、法善が剣で撃つと化して甕の蓋となり、甕からは美酒が溢れ出た。後世、「麴生」「麴処士」「麴居士」「麴道士」「麴先生」等は酒の異名となる。

さらに、敦煌変文の一つ「葉淨能詩」には道術に関するさまざまな逸話が語られるが、その第四話に酒甕に化した道士の話が含まれる。梗概を記せば、葉淨能が玄宗を楽しませようと甕に道士の姿を描いたところ、甕はたちまち身の丈三尺ほどの道士に変じた。淨能は玄宗に、「この道士は酒令にたくみで、古今に通じております」と薦めた。玄宗が話してみると、大酒を飲むというのでどんどん飲ませたが、「これ以上飲めば礼を失することになります、もういっぱいです」と辞退した。淨能が怒って首を刎ねさせると、切り落とされた頭は酒甕の蓋になり、身は甕になった。その甕には道士の絵が描かれていたので、玄宗は大笑いした。（項楚『敦煌変文選注（増訂本）上』所収「葉淨能詩」、中華書局、二〇〇六年）

この他、『太平広記』卷三七〇・精怪三・雜器用「姜修」には次のような話を収める。

并州の酒家、姜修のもとに、黒い服に黒い帽子、身の丈は三尺、腰周りの太い男が現れて共に飲んだが、三石近く飲ん

でも酔った風がない。不思議に思い尋ねると、自分は成徳器といい、今は年老いて、五石で満腹になる、というのでさらに飲ませると、五石に至ってにわかに酔っ払い、狂ったように歌い舞い、「楽しいかな、楽しいかな」と言つて地に倒れ伏した。部屋に寝かせようとしたところ、男は目を覚まして走り出すや、石にぶつかつて姿が見えなくなつてしまった。翌朝見てみると、それは年古りた酒甕で、すでに割れていた。（出典は唐・柳祥『瀟湘録』。選者については、李劍国『唐五代志怪伝奇叙録』下冊九二九頁「瀟湘録十卷」参照。）

右のように、小柄な男が大酒を飲み、酒量の限度を越えると正体を現して酒壺や甕に変わるという話は器物に関わる変身譚の一群と言えるが、いま酒壺を離れて、常持蒲ないし麴処士に通じる性格の人物を広く求めるならば、一例として卷四〇五・宝六・錢「岑文本」に見える、上清童子元宝を挙げることができる。

岑文本のもとに上清童子元宝と名乗る道士が訪ねてきた。円形と方形をした青い冠をかぶり、青い筒袖の衣を着て、先の丸い青い靴を履いている。元宝は漢代以来の歴史について、自分の眼で見てきたかのように、日の暮れるまで滔滔と語る。

岑文本は不思議に思い、帰ってゆく道士の後をつけさせると古い墓に至ったので、掘ってみると青銅の古銭が出てきた。

表に「元寶」と書いてあり、外は丸く、内に四角い穴が開いている。それは漢の五銖錢であつた。（出典は唐・鄭還古『博異志』。底本に「傳異志」とあるのは誤り。）

訪ねてきた男が博学多識で歴史に通じ、滔滔と弁じる点は「葉靜能」と同じであり、全身青づくめで、四角と丸の身なりをしていると言ひ、その風采が正体を暗示していることも共通する。上清童子元宝が漢代以来の歴史について滔滔と語つたのは、その正体が漢の五銖錢であつたことによる。同様に、本話の常持蒲が天地開闢以来の歴史についてありと語つたのは、酒造りの始祖杜康が夏の臣とも黄帝の時の人ともされるように、酒が上古以来の歴史を有することと相応じている。上清童子も常持蒲もいわば歴史の生き証人である。葉法善が、「高談廣論」もなく酒ばかり飲んでおつてと言つて麴処士を叱りつけたのは、博学多識によつて滔滔と弁じるのが麴処士本来の役目であるからと解せよう。

なお、葉靜能に関する諸資料については、李劍国『唐五代志怪伝奇叙録』上冊四七一頁（『広異記』『葉淨能』）、下冊六

三五頁（『河東記』『葉靜能』）、同九一四頁（『葉法善傳一卷』）、『太平広記会校本』八五五頁の校記「九」、程毅中『葉淨能詩』（『唐代小説史』人民文学出版社、二〇〇三年）、遊佐昇『葉法善と葉淨能』（本話の注「葉靜能」参照）等に詳しい。

（澤崎久和）

第八話 獨孤遐叔

（卷二百八十一・

夢六・夢遊上）

【全文】

貞元中。進士獨孤遐叔。家于長安崇賢里。新娶白氏女。家貧下第。將遊劍南。與其妻訣曰。遲可周歲歸矣。遐叔至蜀。羈栖不偶。逾二年乃歸。至鄠縣西。去城尚百里。歸心迫速。取是夕及家。趨斜徑疾行。人畜既殆。至金光門五六里。天已暝。絕無逆旅。唯路隅有佛堂。遐叔止焉。時近清明。月色如晝。繫驢于庭外。入空堂中。有桃杏十餘株。夜深。施衾幃於西窗下。偃臥。方思明晨到家。因吟舊詩曰。近家心轉切。不

敢問來人。至夜分不寐。忽聞牆外有十餘人相呼聲。若里胥田叟。將有供待迎接。須臾。有夫役數人。各持畚鍤箕箒。于庭中糞除訖。復去。有頃。又持牀席牙盤燼炬之類。及酒具樂器。

闐咽而至。遐叔意謂貴族賞會。深慮爲其斥逐。乃潛伏屏氣。

於佛堂梁上伺之。鋪陳既畢。復有公子女郎共十數輩。青衣黃頭亦十數人。步月徐來。言笑宴宴。遂于簾中間坐。獻酬縱橫。

履舄交錯。中有一女郎。憂傷摧悴。側身下坐。風韻若似遐叔之妻。窺之大驚。卽下屋楸。稍於暗處。迫而察焉。乃真是妻也。方見一少年。舉盃矚之曰。一人向隅。滿坐不樂。小人竊

不自量。願聞金玉之聲。其妻冤抑悲愁。若無所控訴。而強置於坐也。遂舉金爵。收泣而歌曰。今夕何夕。存耶沒耶。良人

去兮天之涯。園樹傷心兮三見花。滿座傾聽。諸女郎轉面揮涕。

一人曰。良人非遠。何天涯之謂乎。少年相顧大笑。遐叔驚憤久之。計無所出。乃就階陛間。捫一大磚。向坐飛擊。磚纔至地。悄然一無所有。遐叔悵然悲惋。謂其妻死矣。速駕而歸。

前望其家。步步悽咽。比平明。至其所居。使蒼頭先入。家人並無恙。遐叔乃驚愕。疾走入門。青衣報娘子夢魘方瘳。遐叔至寢。妻臥猶未興。良久乃曰。向夢與姑妹之黨。相與翫月。

出金光門外。向一野寺。忽爲凶暴者數十輩。脇與雜坐飲酒。

又說夢中聚會言語。與遐叔所見並同。又云。方飲次。忽見大磚飛墜。因遂驚魘殆絕。纔寤而君至。豈幽憤之所感耶。出河東記

【原文】 1

貞元中、進士獨孤遐叔、家于長安崇賢里。新娶白氏女、家貧下第、將遊劍南。與其妻訣曰、遲可周歲歸矣。遐叔至蜀、羈栖不偶、逾二年乃歸。至鄠縣西、去城尚百里、歸心迫速、取是夕及家。趨斜徑疾行、人畜①既殆、至金光門五六里、天已暝、絕無逆旅。唯路隅有佛堂、遐叔止焉。

【訓読】 1

貞元中、進士の独孤遐叔、長安の崇賢里に家す。新たに白氏むすめの女を娶るも、家貧しくして下第し、將に劍南に遊ばんとす。其の妻と訣わかれて曰く、「遅るるも周歲にて歸るべし」と。遐叔蜀に至るも、羈栖は不偶にして、二年を逾こへて乃ち歸る。鄠こ県の西に至り、城を去ること尚ほ百里なるも、帰心は迫速し、是の夕べに家に及ばんことを取る。斜徑を趨はしりて疾行するに、人畜既に殆つかれ、金光門に至らんとすること五六里にして、天は已に暝くらく、絶えて逆旅なし。唯だ路隅に仏堂

の有るのみなれば、遐叔焉に止まる。

【訳】 1

唐の貞元年間のこと、進士の独孤遐叔は長安の崇賢里に居を構えていた。白氏の娘を娶ったばかりであったが、家が貧乏で科挙にも落第してしまった。そこで劍南に遊歴しようとして、その妻に、「遅くとも一年で帰ってくるから」と別れを告げた。しかし蜀の旅住まいも不遇で、二年を越えてやっと帰途に着くことになった。鄠県の西に至り、長安の町まではまだ百里ほどあったものの、帰心に急かされ、今晩中に家に着こうと考えた。脇の小道に入って走り急いだが、人も驢馬も疲れはて、金光門まで五六里のところで、空はもう暗くなつてしまい、一軒の宿屋も見当たらない。ただ道端に仏堂がぼつんと立っているだけだったので、遐叔はここに泊まることにした。

【校記】 1

①「人畜」、会校本校記に「沈本作『久之』」とある。

なお本話は、『太平広記』の他にも、多くの類書や小説集に採録されており（【参考】参照）、字句の異同も極めて多い。

ただ、ここでは煩を避け、『太平広記』諸本の異同と関連する

箇所に限って付記するに止める。

【注】 1

○貞元 唐の徳宗の年号（七八五〜八〇五）。『河東記』では、貞元年間の出来事として語られる話が、他にも「蕭洞玄」（巻四四・神仙四四）、「胡媚兒」（巻二八六・幻術三）、「盧佩」（巻三〇六・神一六）、「韓昇」（巻三四〇・鬼二五）、「鄭馴」（巻三四一・鬼二六）、「申屠澄」（巻四二九・虎四）、「盧從事」（巻四三六・畜獸三・馬）、「李自良」（巻四五三・狐七）の八話と多い。

○進士 科挙（官吏登用試験）の進士科の受験資格を得た者をいう。郷貢進士。進士科では、試験に詩文が課せられた。出世コースであったため、もう一つの科目である明経科に比べて合格が極めて難しかった。

○独孤遐叔 伝記は伝わらないが、『新唐書』巻七五下・宰相世系表の独孤氏の項に「遐叔」の名が見える。また表の右欄には「申叔校書」とあり、兄と思われる。独孤申叔は、徳宗の時に博学宏詞科に登第して校書郎となっており、賦六編（『全唐文』巻六一七）と詩一首（『全唐詩』巻四七〇）が現存する。

この人物は韓愈や柳宗元とも親しかったようで、二人に「獨

孤申叔哀辭」(『韓昌黎文集』卷二二)、「送獨孤申叔侍親往河序」(『柳河東集』卷二二)などの文が残されている。

『新唐書』同卷世系表の記事によれば、獨孤氏はもと劉氏の出自で、その祖は匈奴を撃つて捕らえられ、子の代になって単于から獨孤部の号を受けた。後魏の時代、孝文帝に従って洛陽に移住し、部名を氏としたという。北朝以来の名族で、唐代においても代宗に仕え詩文に優れた獨孤及、昭宗に仕えて宰相となった獨孤損らがいる。

なお獨孤遐叔は、『陝西通志』卷三〇・選舉・進士に「獨孤遐叔、長安人」とあり、同書卷一〇〇・拾遺・神異には、唐の任蕃『夢遊錄』からの引用としてこの話を節録する。『夢遊錄』については、李劍国『唐五代志怪傳奇叙録』が偽書であることを考証している(下冊一一六五～六頁)。

○崇賢里 唐代の長安城中の里坊の名。朱雀門街西の第三街、十三坊の北から八番目。『太平広記』では、卷二四三・治生・寶義(出典は唐・溫庭筠『乾闥子』)など、六話にその名が見える。なお清・徐松『登科記考』は、卷四の崇賢坊の条に『河東記』の本話を引いて、「進士獨孤遐叔宅」と記す。

○新 「…したばかり」の意。

○白氏 『新唐書』卷七五下・宰相世系表によれば、白氏は秦の將軍白起の血を引く一族で、太原を本籍とする。唐代では詩人の白居易、弟で小説「李娃伝」の作者の白行簡、あるいは宰相となった従弟の白敏中が知られるが、家柄としては寒門であつた。『太平広記』卷三〇一・神一一の「仇嘉福」(出典は唐・戴孚『広異記』)に「遇一少年、狀若王者、裘馬僕從甚盛。見嘉福有喜狀、因問何適。嘉福云、應舉之都。人云、吾亦東行。喜君相逐。嘉福問其姓、云、姓白。嘉福竊思朝廷無白氏貴人、心頗疑之。…(一少年に遭ふに、狀は王者の若く、裘馬僕從は甚だ盛んなり。嘉福を見て喜ぶ狀有りて、因りて何れに適かんとするかを問ふ。嘉福云ふ、「挙に応じて都に之かんとす」と。人云ふ、「吾も亦た東行せん」と。君の相ひ逐^{したが}ふを喜ぶ」と。嘉福 其の姓を問ふに、「姓は白なり」と云ふ。嘉福 窃^{ひそ}かに朝廷に白氏の貴人無きを思ひ、心に頗る之を疑ふ。…」とある。白氏の家柄が窺われよう。

○將遊劍南 「劍南」は唐の道名(行政区画の名)で、四川省の劍閣以南の地。科擧に失敗した士人は、地方の有力者を頼つて客寓することが多かった。『太平広記』卷四七・神仙四七「許棲巖」に「許棲巖、岐陽人也。舉進士、習業於昊天觀。

……時南康韋皋太尉鎮蜀、延接賓客。遠近慕義、遊蜀者甚多。巖將爲入蜀之計、…（許棲巖は岐陽の人なり。進士に挙げられ、業を昊天觀に習ふ。……時に南康の韋皋太尉蜀に鎮し、賓客を延接す。遠近義を慕ひ、蜀に遊ぶ者甚だ多し。巖將に入蜀の計を為さんとし、…）とある（出典は唐・裴鏘『伝奇』。また、卷一五一・定数「豆盧署」にも、「貞元六年、舉進士下第、將遊信安、以文謁郡守鄭武贍（貞元六年、進士に挙げらるるも下第し、將に信安に遊び、文を以て郡守の鄭武贍に謁せんとす）」とある（出典は唐・鍾輅『前定錄』）。

○周歲 まる一年。周年。

○羈栖 旅住まい。羈棲。『太平広記』では、他に卷七四・道術四「陳季卿」に「辭家十年、舉進士、志不能無成歸、羈棲輦下（家を辞すること十年にして、進士に挙げらるるも、志成すところ無くて帰る能はざれば、輦下に羈棲す）」とある

（出典は唐・李玖『纂異記』、「纂異記」に作るのは誤り）。

○不偶 世間に認められないさま。「不遇」に同じ。なお顔延年「五君詠五首」の「嵇中散」には、「中散不偶世、本自餐霞人（中散世に偶はず、本自ら餐霞の人なればなり）」とあり（『文選』卷二二）、李善注に「孫盛晉陽秋曰、嵇康性不偶俗

（孫盛の晉陽秋に曰く、嵇康性俗に偶はず）」とある。つまり「世俗と反りが合わない」の意味でも用いられる語であるが、ここではそうしたニュアンスは希薄であろう。『太平広記』では、卷一九九・文章二「周匡物」の「落魄風塵、懷刺不偶（風塵に落魄し、刺を懷にして不偶なり）」（出典は唐・黃璞『閩川名士伝』など）。

○鄠縣 県名。現在の陝西省西安市戸県。長安の西南に位置するこの地は、『太平広記』においても卷七〇・女仙一五「裴玄靜」（出典は十国呉・沈汾『続仙伝』など、十話に見える。

蜀からの帰路、劍閣を通り興元府を経て駱谷道に進めば、整屋県・鄠県を経過して長安に至る。嚴耕望『唐代交通図考』（中央研究院歴史語言研究所、一九八五～二〇〇三年／上海古籍出版社、二〇〇七年）第四卷・第14図「唐代渭水蜀江間山南劍南区交通図（西幅）」参照。

○百里 唐代の一里は、約五百六十メートル。従つて百里は約五十六キロ。

○歸心 郷里にもどりたいと思う心。常用の語で、『太平広記』にも散見されるが、『河東記』では本話のみ。

○迫速 さしせまる。せつば詰まる。「督促」に同じ。『芸文

類聚』卷八八・木部に引く魏・劉楨の詩に、「隱生眞翳林、控僊（一作控僊）自迫速（隱生 眞^{ふさ}きて林を翳^{おほ}ひ、控僊として自ら迫速す）」の句が見えるが、心理状態を表す用例ではない。唐代の用例に、柳宗元「故銀青光祿大夫宜城開國伯柳公行狀」の「公常好大體、不爲細家之迫速（公常に大体を好み、細家の迫速を為さず）」がある（『柳河東集』卷八、『全唐文』卷五九一）。なお「歸心迫速」の四字句は、他に用例が見当たらない。

○取是夕及家 今晩中に家に辿り着く（方途を選択する）ことにする。「取」字が分かりづらいが、「選ぶ、選びとる」と解した。今場正美・尾崎裕『『太平広記』夢部訳注』（朋友書店、二〇一五年）は、「是の夕に取（なんな）んとして家に及ばんとし」と読んでいる（二九九頁）が、無理があろう。

○斜徑 傾斜し曲がりくねった小道。斜逕。唐・皮日休「鹿門隱書」（『全唐文』卷七九八）に「聖人之道猶坦途、諸子之道猶斜逕。坦途無不之也、斜逕亦無不之也。然適坦途者有津梁、之斜逕者苦荆棘（聖人の道は猶ほ坦途のごとく、諸子の道は猶ほ斜逕のごとし。坦途は之^ゆかざる無きなり、斜逕も亦た之^ゆかざる無きなり。然れども坦途を適^ゆく者は津梁有り、斜

逕を之く者は荆棘に苦しむ）」とある。「斜」字には本来、正しくないの意味があり、従つて「斜徑（逕）」は、通るべき本道を外れた、苦勞の多い脇道ということになる。本話の場合、にも拘わらずそれが家への近道だったのである。なお『太平広記』では、卷八三・異人三「張佐」に、「始自斜逕合路（始め斜逕より路を合す）」の語が見える（出典は唐・牛僧孺『玄怪録』）。

○殆 疲弊する。疲れる。

○金光門 唐長安の西の城郭にある三門の一つ。北が開遠門、南が延平門で、中間にあるのが金光門。西の昆明池へと通じる道路が走っていた。『太平広記』では、卷七六・方士一「李淳風」（出典は唐・劉餗『国史異纂』および唐・牛勣『紀聞』）など、五話に名が見える。白居易の七絶「醉中歸盤屋」（『白氏文集』卷一三、『全唐詩』卷四三六）にも、「金光門外昆明路、半醉騰騰信馬迴。數日非關王事繫、牡丹花盡始歸來（金光門外の昆明路、半酔騰騰として馬に信^まかせて迴^{かへ}る。數日王事の繫ぐに関わるに非ず、牡丹の花尽きて始めて帰り來たる）」とある。彼が盤屋（長安の西數十キロに位置する）の県尉であつた時、數日長安に滞在して盤屋に戻る際の作で、ここを

通つて都との間を往来していたことが分かる。

○絶無 「絶」は、否定詞の前に置いて語気を強める副詞。全くない。

○逆旅 旅館。宿屋。「逆」は、迎える。旅人をむかえるの意。

『春秋左氏伝』僖公二年冬十月・伝「保於逆旅」の杜預注に「逆旅、客舎也」とある。『河東記』では「韋丹」（卷一一八・報応一七・異類）にも用例が見える。

○佛堂 仏像を安置する建物。『太平広記』にも用例は多いが、『河東記』では本話のみ。

【原文】2

時近清明、月色如晝。繫驢于庭外、入空堂中、有桃杏十餘株。夜深、施衾幃于西窗下、偃臥、方思明晨到家。因吟舊①詩曰、近家心轉切、不敢問來人。至夜分不寐、忽聞牆外有十餘人相呼聲。若里胥田叟、將有供待②迎接。須臾、有夫役數人。各持畚鍤箕箒、于庭中糞除訖、復去。有頃、又持牀席牙盤燼炬之類、及酒具樂器、闐咽而至。遐叔意謂③貴族賞會。深慮爲其斥逐、乃潛伏屏氣、於佛堂梁上伺之。鋪陳既畢、復有公子女郎共十數輩。青衣黃頭亦十數人、步月徐來、言笑宴

宴④。遂于筵中間坐、獻酬縱橫、履舄交錯。

【訓読】2

時に清明に近く、月色は昼の如し。驢を庭外に繋ぎ、空堂中に入るに、桃杏十余株有り。夜深くして、衾幃を西窓の下に施げ、偃臥して、方に明晨に家に至らんことを思ふ。因りて旧詩を吟じて曰はく、「家に近くして心は軋た切なるも、敢へて来人に問はず」と。夜分に至るも寐ねざるに、忽ち牆外に十余人の相呼ばはる声有るを聞く。里胥・田叟の將に供待迎接有らんとするが若し。須臾にして夫役数人有り。各おの畚鍤・箕箒を持し、庭中に于いて糞除し訖り、復た去る。頃くありて、又た牀席・牙盤・燼炬の類及び酒具・樂器を持し、闐咽して至る。遐叔意に謂へらく貴族の賞会ならんと。深く其の斥逐するところとなるを慮り、乃ち潜伏して氣を屏め、仏堂の梁上に於いて之を伺ふ。鋪陳既に畢るに、復た公子・女郎の共に十数輩有り。青衣・黄頭も亦た十数人、月に歩みて徐ろに來たり、言笑宴宴たり。遂に筵中に于いて間坐し、獻酬縱横にして、履舄交錯す。

【訳】2

折しも清明節に近く、月の光は真昼のように明るかった。

驢馬を庭の外に繋ぎ、がらんとした堂内に入ってゆくと、桃や杏の樹が十余株あった。夜も更けて、夜具を西窓の下に敷いて横になり、明朝には家に帰り着けると思った。そこで、「家に近づき思は募るばかりだが、来る人に安否も問いかねる」と、旧詩を吟じた。夜半になっても寝付かれずにいると、不意に塀の外に十人余りが呼びあう声がした。それは村の役人や年寄りたちが客人を出迎え接待しようとしているかのようにであった。すぐに役夫数人が現れ、おのおの熊手や箒を手にし、庭の中を掃除し終わると、また立ち去っていった。しばらくすると、また敷物・象牙の皿・蠟燭の類、酒器や楽器を持ち、がやがやと賑やかに運んできた。遐叔は、てっきりこれは貴族の宴会であろうと思ひ、追ひ払われるのを心配した。そこで仏堂の梁の上に隠れて息を潜め、様子を伺った。席の用意が終わると、さらに貴族の子弟や年若い女性たちが十数人あらわれ、下女や下僕もまた十数人ほど、月影を踏んでゆったりと笑いさざめきながらやって来た。一行が筵席に着くと、杯が飛び交ひ、履き物も入り乱れる有様となった。

【校記】 2

①「舊」、会校本校記に「沈本無此字」とある。

②「待」、近刊の李劍国『唐五代伝奇集』（中華書局、二〇一五年）によれば、『太平広記詳節』は「施」に作るという（二九二頁）。

③「謂」、会校本は「謂」字の下に「必」字を加え、校記に「原無此字。現據沈本補」という。なお、『歳時広記』『説郛』『雪窓談異』『艶異編』『古今説海』『太平広記鈔』『五朝小説』『燕居筆記』『緑牕女史』『唐代叢書』『龍威秘書』『香艷叢書』は、いずれも「必」字なし。

④「宴宴」、会校本は「晏晏」に作り、校記に「原作『宴宴』。現據沈本改」という。なお、『歳時広記』『説郛』『雪窓談異』『艶異編』『古今説海』『太平広記鈔』『五朝小説』『燕居筆記』『緑牕女史』『唐代叢書』『龍威秘書』『香艷叢書』は、いずれも「晏晏」に作る。

【注】 2

○清明 二十四節氣の一つ。清明節。春分から十五日目。この日、郊外に出て遊び、墓参りをする習慣があり、人出で賑わった。小説においても、事件の発端をなす日としてしばしば用いられる。『太平広記』では、卷二七四・情感・「崔護」

（出典は唐・孟棻『本事詩』）、卷三三七・鬼三三「李畫」（出

典は唐・鄭還古『博異志』、卷三三九・鬼二五「崔書生」（出典は晋・張華『博物志』）など。

○月色如畫 月の輝きが昼のように明るい。一般的な表現であるが、唐代以前の用例が意外に見当たらない。僅かに唐末の崔道融「擬樂府子夜四時歌四首」其三に、「月色明如畫、蟲聲入戶多（月色明るきこと昼の如く、虫声戸に入りて多し）」

（『全唐詩』卷七二四）と見える。四字句としては、後唐・王仁裕『開元天寶遺事』卷二「撤去燈燭」の、「時長天無雲、月色如畫（時に長天に雲無く、月色は昼の如し）」が早いものであろう。時代を降って宋代になると、贊寧『宋高僧伝』卷二四「唐沙門志玄傳」に「玄有意尋訪名迹、至絳州夜泊墓林中。其夜月色如畫、見一狐從林下將髑髏置之於首、…（玄名迹を尋訪するに意有りて、絳州に至りて夜に墓林中に泊す。其の夜月色は昼の如く、一狐の林^よ從り下り髑髏を^も將つて之を首に置くを見るに、…）」、何遠『春渚紀聞』卷三・「楊醇叟道術」に「一日與沈飲於娼樓、月色如畫而笛素不從、…（一日与に娼樓に沈飲するに、月色昼の如くして笛は素と従はず、…）」、郭彖『睽車志』卷五の魏良佐の語に「中夜月色如畫、舟人皆寢、聞舳尾拍浮之聲。…（中夜月色は昼の如く、舟人皆な

寝ぬるに、舳尾に拍浮の声を聞く。…）」とあるなど、用例が急増し、月明かりの下で怪異が起こる場面にも屢々用いられる。『宋高僧伝』は狐の変化、『春渚紀聞』は、道術によって遠方から瞬時に笛を調達する話、『睽車志』は流れ着いた水死体の怪。）

○衾幃 夜着と一重の寝間着。「衾幃」に同じ。『詩經』国風・召南「小星」の「抱衾與裯、寔命不猶（衾と裯を抱く、寔に命猶^{ひと}しからず）」に基づく。魏・曹植「贈白馬王彪」詩に「何必同衾幃、然後展慇懃（何ぞ必ずしも衾幃を同じくして、然る後に慇懃を展^のべんや）」の句が見える。『河東記』では、「申屠澄」（卷四二九・虎四）に、「解鞍施衾幃焉（鞍を解きて衾幃を施^{ひろ}ぐ）」とある。『太平広記』では、『河東記』のこの二例のみ。

○偃臥 寝る。寝ころぶ。『河東記』では、「柳渢」（卷三〇八・神一八）、「崔紹」（卷三八五・再生一一）に用例が見える。

○近家心轉切、不敢問來人 唐・宋之問「渡漢江」の「近鄉情更怯、不敢問來人（郷に近づきて情は更に怯え、敢へて來人に問はず）」を踏まえる（『全唐詩』卷五三）。なお『全唐

『詩』は、同じ詩を晩唐の李頻の作として卷五八九にも収めるが、宋之問の作とするのが正しい。佟培基編撰『全唐詩重出誤収考』（唐詩研究集成・陝西人民出版社、一九九六年）の三七～八頁、陶敏等『沈佺期宋之問集校注』（中国古典文学基本叢書・中華書局、二〇〇一年）の四四一頁注を参照。二句が詠うのは、「家が近くなるにつれて思はいよいよ募るが、もしや良くない知らせがあつたらと心配で、家の方からやって来る人に敢えて安否を尋ねることもできない」という心境。「不敢…」は、思い切つて…することができない。

この二句は、宋の祝穆『古今事文類聚』別集卷二五・人事部・行旅、および潘自牧『記纂淵海』卷一七四・襟懷部・還舍（一九八八年中華書局刊の宋刻一九五卷本による。百卷本では卷八三）にも引用されている。注記にはそれぞれ「獨孤還」「脞說載獨孤還詩」とあつて名が異なるが、本話に基づくものと考えられる。『脞說』は宋の張君房の撰。散佚して伝わらない。）

○里胥 村役人。胥は小役人。『太平広記』にも「閭玄二」（卷二四二・遺忘、出典は唐・張鷟『朝野僉載』）をはじめとして数例。

○田叟 田舎の老人。田舎親父。『太平広記』では、卷三三三・鬼一八「武德縣田叟」（出典は唐・牛肅『紀聞』）、卷三四七・鬼三二「李佐文」（出典は唐・薛用弱『集異記』）に用例が見える。なお、「里胥田叟」の四字句は、他に見当たらない。

○供侍 そば近くに仕える。もてなす。『河東記』では、「板橋三娘子」（卷二八六・幻術三）に「主人供侍愈厚（主人供待すること愈^{いよいよ}厚し」とある。

○迎接 客を迎えてもてなす。出迎えてもてなす。『河東記』では、「李自良」（卷四五三・狐七）に「然後自來迎接王生（然る後に自ら来りて王生を迎接す）」とある。なお、「供侍迎接」の四字句は、他に見当たらない。

○須臾 しばらく。ほんの少しの間。

○夫役 労役に使われる人。人夫。『太平広記』では、他に卷二三一・器玩三「陳仲躬」（出典は唐・鄭還古『博異志』）、卷四八三・蛮夷四「南州」（出典は後周・王仁裕『玉堂閒話』）の二例。

○番鋪 もつことすき。『太平広記』では、卷八五・異人五「金州道人」（出典は後周・王仁裕『王氏見聞録』）をはじめとして他に八例。

○箕箸 ちりとりとほうき。『太平広記』では、卷三四・神仙三四・「崔煒」（出典は唐・裴鉞『伝奇』）をはじめとして他に五例。

○糞除 払い除く。清掃する。「糞」は、清掃する。『春秋左氏伝』昭公三年秋七月の伝に、「此年春、小人糞除先人之敝廬（此の年の春、小人 先人の敝廬を糞除す）」とある。『太平広記』では、この一例のみ。

○牀席 広く座臥の用具を指す。『太平広記』にも散見される。

○牙盤 象牙製の大皿、あるいは精巧で美しい彫飾を施した大皿。またそれに盛られた料理、珍味。『旧唐書』卷一〇五・

韋堅伝に「堅跪上諸郡輕貨、又上百牙盤食（堅 跪きて諸郡の輕貨を^{たてまつ}上り、又た百牙盤食を上る）」とある。『太平広記』

では他に三例。うち卷二三四・食「御厨」に、「御厨進饌、凡器用有少府監進者、用九釘食。以牙盤九枚、裝食味於其間、

置上前。亦謂之看食（御厨の饌を進むるに、凡て器用には少府監の進むる者有りて、九釘食を用ふ。牙盤九枚を以て、食味を其の間に装ひ、上前に置く。亦た之を看食と謂ふ）」の記事が見える（出典は唐・盧言『盧氏雜説』。つまり皇帝の食事の際、始めに料理を並べてみせる「看食」に、「牙盤」が用

いられたようである。「看食」は、『漢語大詞典』に「酒席上の点心類食品。拘于礼儀略嘗輒止、故名」とあり（第七卷一八二頁）、儀礼的に軽く口にし、目を楽しませる点心類ということになる。

「牙盤」については、説が分かれる。『大漢和辞典』は「象牙で作った盆」（第七卷六〇八頁）とし、黎虎主編『漢唐飲食文化史』（北京師範大学出版社、一九八八年）一六六頁、虞雲国主編『宋代文化史大辞典』（漢語大詞典出版社、二〇〇六年）上冊一三三頁の説明も、象牙製と見ている。しかし『漢語大詞典』には、「言彫精美的盤子」とある（第五卷二八〇頁）。

古典の中からさらに幾つか資料を挙げてみると、古くは南朝宋・鮑照の樂府「代淮南王」二首其一に「服食鍊氣讀仙經、琉璃作（一作藥）椀牙作盤（服食鍊氣仙經を読み、琉璃椀と作し牙盤と作す）」とあるが（『鮑明遠集』卷三、『先秦漢魏晉南北朝詩』宋詩卷七）、熟語として特定の皿を示す用例ではない。時代を降って、宋・程大昌『演繁露』卷二には「牙盤」の一条があり、『盧氏雜説』を引いて「據此即是以牙飾盤矣（此れに拠れば即ち是れ牙を以て盤を飾るなり）」と言う。

これに対して明・方以智『通雅』は、程大昌の説を「此説拘

甚（此の説拘らはること甚だし）と退けた上で、「或曰、牙盤謂其色白也。一曰、看食釘坐、如今粘果高卓、牙列在前、言之牙盤（或いは曰く、「牙盤は其の色の白きを謂ふなり」と。一に曰く、「看食して釘坐すること、今の粘果卓に高くし、牙列して前に在るが如ければ、之を牙盤と言ふ」と）と付け加える（巻三九・飲食）。これに拠れば必ずしも象牙製とは限らないようである。ただ拙訳では、一先ず『大漢和』等の説に従った。

○蠟炬 「蠟」は、火の燃えるさま、火の燃える音。「炬」は、たいまつ、かがり火。あるいは、ろうそく。「蠟」と「蠟」は通用し、「蠟炬（ろうそく）」の意味でも用いられる。元・陶宗儀『說郛』巻一七に引く侯廷慶『退斎雅聞錄』（成立年末詳）の「蠟炬」詩に、「一女賦蠟炬云、尊前獨垂淚、應爲未灰心（一）女蠟炬を賦して云ふ、尊前独り涙を垂るるは、応に未だ心を灰にせざるが為なるべしと」とある。『太平広記』ではこの一例のみ。

○闐咽 人が満ちあふれる。雑踏。唐・張詠『宣室志』巻三「張詠」に、「輿馬人物誼誼然闐咽於路（輿馬人物 誼誼然として路に闐咽す）」とある。『太平広記』では、巻八六・異人

六「天自在」（出典は宋・景煥『野人閑話』）をはじめとして、他に七例。

○賞會 心楽しい会合。鑑賞の集い。『晋書』巻八三・車胤伝に「又善於賞會、當時每有盛坐而胤不在、皆云無車公不樂（又た賞會を善くし、当時盛坐有る毎に胤の在らざれば、皆云ふ、車公無くんば楽しまずと）」とある。『太平広記』では、意外にこの一例のみ。

○斥逐 追いはらう。『太平広記』では、巻四四・神仙四四「田先生」（出典は前蜀・杜光庭『仙伝拾遺』）をはじめとして、他に六例。

○屏氣 息をひそめる。『太平広記』に散見され、『河東記』では「李知微」（巻四四〇・畜獸七・鼠）に、「知微側立屏氣、伺其所爲（知微側立屏氣して、其の爲す所を伺ふ）」とある。

○鋪陳 敷き並べる。『太平広記』では、巻一六・神仙一六「張老」（出典は唐・闕名『会昌会解頤錄』）をはじめとして、他に七例。

○公子 貴族の子弟。牛志平・姚兆女『唐人称谓』（隋唐歴史文化叢書・三秦出版社、一九八七年）四八〜九頁参照。

○女郎 少女。年頃の未婚の女性を指している。『唐人称谓』

九九頁参照。

○青衣 身分の低い者が着る衣服。転じて侍女、下女。『河東記』では、「慈恩塔院女仙」（巻六九・女仙一四）、「韋丹」（巻一一八・報応一七・異類）、「段何」（巻三四九・鬼三四）に用例が見える。

○黃頭 水軍、あるいは船頭などの意味が一般的であるが、ここでは童僕、下男の意。『漢語大詞典』は、唐・戎昱「贈別張駙馬」詩の「華堂金屋別賜人、細眼黃頭總何在（華堂金屋別に人に賜ひ、細眼黃頭総^すべて何れに在りや）」（『全唐詩』巻二七〇）、および『太平広記』の本話を引いて、「童僕」と説明する（第一二巻一〇〇四頁）。『太平広記』では、巻一七・神仙一七「裴謨」をはじめ、数話に用例が見える。

○歩月 月明かりの下を散歩する。『太平広記』では、巻三〇・神仙三〇「凡八兄」（出典は前蜀・杜光庭『仙伝拾遺』）をはじめとして十例以上。

○言笑 談笑する。『河東記』では、「慈恩塔院女仙」（巻六九・女仙一四）に「月夕、忽見一美婦人、從三四青衣來。遶佛塔言笑、甚有風味（月の夕べ、忽^{たちま}ち一美婦人の三四の青衣を從へて來たるを見る。仏塔を遶^{めぐ}りて言笑し、甚だ風味有

り）」、また「板橋三娘子」（巻二八六・幻術三）に「季和素不飲酒、亦預言笑（季和素と酒を飲まざるも、亦た言笑に預^{あづ}かる）」とある。

○宴宴 安らいで憩うさま。燕燕。『漢書』巻二七・五行志下之下「詩曰、或宴宴居息、或盡頼事國」の顔師古の注に「小雅、北山之詩也。宴宴、安息之貌也（小雅、北山の詩なり。宴宴は安息の貌なり）」とある。なお、現行の『詩経』は「燕燕」に作る。また『詩経』衛風・「氓」に「總角之宴、言笑晏晏（總角の宴、言笑晏晏たり）」とあり、後に「言笑宴宴」とも記されるようになった（宋・王質『詩総聞』など）。『太平広記』では、この一例のみ。

○間坐 のんびりと座る。『太平広記』中には用例が意外に少なく、他に巻三六五・妖怪七「戴簪」（出典は唐・段成式『酉陽雜俎』）の一例のみであるが、「閑坐」では三例。

○獻酬 杯をやりとりする。『文選』巻一・班固「東都賦」に、「獻酬交錯、俎豆莘莘（獻酬交錯し、俎豆莘莘たり）」とある。『太平広記』にも散見される。

○縱横 乱れ散らばるさま。常見の語。

○履屩 くつ。はきもの。「履」は一重底のくつ、「屩」は二

重底のくつ。『史記』卷一二六・滑稽列伝・淳于髡に「男女同席、履舄交錯、杯盤狼藉、堂上燭滅（男女席を同じうして、履舄は交錯し、杯盤狼藉たりて、堂上燭滅す）」とある。『太平広記』では意外に用例が見られず、この一例のみ。

【原文】 3

中有一女郎、憂傷摧①悴、側身下坐②。風韻若似遐叔之妻、窺之大驚。卽下屋袱③、稍於暗處、迫而察焉、乃眞是妻也。方見一④少年、舉盃矚⑤之曰、一人向隅、滿坐不樂。小人竊不自量、願聞金玉之聲。其妻冤抑悲愁、若無所控訴。而強置於坐⑥也、遂舉金爵⑦、收泣而歌曰、今夕何夕、存耶沒耶。良人去兮天之涯、園樹傷心兮三見花。滿座傾聽、諸女郎轉面揮涕。一人曰、良人非遠。何天涯之謂乎。少年相顧大笑。遐叔驚憤久之、計無所出。乃就階陛間、捫一大磚、向坐飛擊。磚纔至地、悄然一無所有⑧。遐叔悵然悲惋、謂其妻死矣。速駕⑨而歸、前望其家、步步悽咽。

【訓読】 3

中に一女郎有りて、憂傷摧悴し、身を下坐に側つ。風韻そはだ遐叔の妻に似たるが若ければ、之を窺ひて大いに驚く。即ち

屋より下り伏（袱）し、稍く暗處に於いて迫りて焉を察すれば、乃ち眞に是れ妻なり。方に一少年を見るに、杯を挙げて之を矚て曰く、「二人隅に向かへば、滿坐樂しまず。小人竊かに自ら量らず、金玉の声を聞かんことを願ふ」と。其の妻は冤抑悲愁し、控訴する所無きが若し。而るに強ひて坐に置くや、遂に金爵を挙げ、泣なみだを収めて歌ひて曰く、「今夕は何の夕べぞ、存せるや没せるや。良人は去れり 天の涯に、園樹傷心して三たび花を見る」と。滿座傾聽し、諸女郎は面を転じて涕を揮ふ。一人曰く、「良人は遠きに非ず。何ぞ天涯と之れ謂はんや」と。少年相ひ顧みて大笑す。遐叔驚憤すること之を久しうするも、計の出づる所無し。乃ち階陛間に就きて、一大磚を捫り、坐に向かひて飛擊す。磚の纔わづかに地に至るや、悄然として一も有る所無し。遐叔悵然として悲惋し、謂へらく其の妻死せりと。駕を速めて帰り、前に其の家を望み、步步悽咽す。

【訳】 3

その中に一人の女性がいて、憂いに心を痛め憔悴した様子で、末席に身を縮め横を向いていた。その優美な風貌が妻にそっくりだったので、遐叔は窺い見て大いに驚いた。そこで

すぐに屋根の梁から降りて身を伏せ、そろそろと暗がりから近づいて彼女を観察してみると、何と本当に妻であつた。ち

ようど一人の若者が目にとまつたが、彼は杯を挙げ彼女を見て言った、「部屋の隅を向いている者が一人でもいると、満座が気まずく白けてしまう。私から身の程もわきまえず頼むのだが、そなたの金玉の美声を聞かせてもらえまいか」と。妻は無体な要求を嘆いたが、訴える相手もない様子であつた。

それを無理に座にすわらせると、彼女はとうとう杯を手にして酒を飲み、涙をおさえて歌つて言つた、「今宵は何の夕べであらう。生きておられるやら、亡くなられたのやら。良き人（我が夫）は去つて天の果てに――。庭の樹々を前に、心を傷めて三たび咲く花を見る」と。満座の人々は耳を傾け、女たちは顔を伏せて涙を払つた。しかし一人が、「良き人は遠いわけでもあるまいに、どうして天の果てなど」とからかうと、若者たちは顔を見合わせて大笑いした。遐叔は驚き憤慨したもの、良い考えも思い浮かばなかつた。そこで階段のあたりで一枚の大きな敷瓦をつかむと、座に向かって投げつけた。瓦が地に落ちたかと思ふや、しんと静まり返つて全てが消え去つてしまつた。遐叔は悲しみにくれ、妻はてつきり

死んだものと思つた。そこで乗物を速めて帰り、前に我が家を望み見て、一歩ごとに咽び泣いた。

【校記】3

①「摧」、筆記本は「慙」に作る。なお、『歳時広記』『陝西通志』も「慙」に作る。

②「坐」、会校本は「涙」に作り、校記に「原作『坐』。現據沈本改」という。なお、「下坐」を『類説』は「不樂」に作る。『歳時広記』『説郛』『雪窓談異』『艷異編』『古今説海』『太平広記鈔』『五朝小説』『燕居筆記』『緑牕女史』『唐代叢書』『龍威秘書』『香艷叢書』は、いずれも「下坐」。

③「杼」、四庫本は「伏」。なお、『説郛』『雪窓談異』『古今説海』『緑牕女史』『唐代叢書』『龍威秘書』は「杼」に作る。『香艷叢書』は「伏」。

④「見一」、許本・黄本・四庫本・筆記本いずれも「一見」に作る。底本（点校本）は「見一」とし、「見一原作一見。據明鈔本改」と注記する。会校本は「見一」に作り、校記に「原作『一見』。現據沈本改」という。なお、『説郛』『艷異編』『古今説海』『五朝小説』『燕居筆記』『緑牕女史』『唐代叢書』『龍威秘書』『香艷叢書』は、「方見一少年」に作

る。『類説』『歳時広記』『太平広記鈔』は「一少年」に作り、「方見」の二字無し。

⑤「囑」、四庫本は「屬」に作り、筆記本は「囑」に作る。いずれも「囑」に通じる。許本・黄本は、底本と同じ「囑」。

会校本は「囑」に作り、校記に「原作『囑』。現據黄本改」という。なお、『類説』『歳時広記』は「囑」、『説郛』『雪窓談異』『艷異編』『古今説海』『五朝小説』『緑牕女史』『唐代叢書』『龍威秘書』『香艷叢書』は「屬」に作る。『燕居筆記』は「酌」に作る。

⑥「坐」、会校本は「座」に作り、校記に「原作『坐』。現據沈本改」という。なお、『歳時広記』は「坐隅」、『説郛』『雪窓談異』『艷異編』『古今説海』『太平広記鈔』『五朝小説』『燕居筆記』『緑牕女史』『唐代叢書』『龍威秘書』『香艷叢書』は、いずれも「坐」に作る。

⑦「爵」、許本・四庫本は「雀」に作る。筆記本・底本は「爵」とし、後者は注記して「爵原作雀。據明鈔本改」という。会校本は「爵」に作り、校記に「原作『雀』。現據沈本、黄本改」という。なお、『説郛』『雪窓談異』『艷異編』『古今説海』『五朝小説』『燕居筆記』『緑牕女史』『唐代叢書』『龍

威秘書』『香艷叢書』は、いずれも「雀」に作る。『太平広記鈔』は「舉金雀〔爵〕」三字を省略。

⑧「一無所有」、許本は「一無所見」、黄本・四庫本・筆記本は「亦無所有」に作る。なお、『歳時広記』は「而悄悄無所有」、『太平広記鈔』は「一無所見」に作る。

⑨「駕」、許本・黄本・四庫本は「驚」に作る。筆記本・底本は「駕」とし、後者は「駕原作驚。據明鈔本改」と注記する。会校本は「駕」に作り、校記に「原作『驚』。現據沈本、黄本、四庫本改」とあるが、黄本と四庫本についての指摘は誤り。なお「速駕而歸」を、『歳時広記』は「命駕即歸」に作り、『太平広記鈔』は「速驚而歸」に作る。

【注】 3

○憂傷 憂いいたむ。常見の語であるが、『太平広記』ではこの一例のみ。

○摧悴 憔悴に同じ。唐・元稹「四皓廟」に「安存考惠帝、摧悴戚夫人（安存す考惠帝、摧悴す戚夫人）」とある（『元氏長慶集』巻一、『全唐詩』巻三九六）。『太平広記』ではこの一例のみ。

○側身 恐れて身を縮める。『詩経』大雅「雲漢」の毛詩小序

に「遇災而懼、側身修行、欲銷去之（災に遇ひて懼れ、身を側そばて行ひを修め、之を銷去せんと欲す）」また、体を横に向ける。

漢・張衡「四愁詩」に「側身東望涕霑翰（身を側うらてて東望すれば涕は翰を霑うるほす）」「側身西望涕霑裳（身を側うらてて西望すれば涕は裳を霑うるほす）」等の句がある（『文選』卷二九）。ここでは両者の意味を兼ねていよう。

○下坐 一番身分の低い者の座席。末席。

○風韻 気品、風格。容貌・たたずまいの美しいさま。『河東記』では、「葉靜能」（卷七二・道術二）に「風韻轉高（風韻うた転た高し）」とある。

○屋楸 「楸」は包袱（ふろしき）で、意味が通じない。四庫本の「下屋伏」に、ひとまず従う。校記に示したように、この箇所は『說郛』や『古今說海』では「屋楸」となっている。「楸」は梁（はり）で、これなら意味もぴたりする。「屋楸」は、あるいは「屋楸」の誤記か。

○稍 ようやく。しだいに。

○矚 注視する。注目する。

○一人向隅、滿坐不樂 漢の劉向『說苑』卷五・貴徳篇に見える、「今有滿堂飲酒者、有一人獨索然向隅而泣、則一堂之人

皆不樂矣（今滿堂に酒を飲む者有り、一人の独り索然として隅に向かひて泣くあらば、則ち一堂の人皆樂しまず）」を踏まえる。『漢書』卷二三・刑法志にも「古人有言、滿堂而飲酒者、有一人鄉隅而悲泣、則一堂之人皆爲之不樂（古人に言有り、堂に満ちて酒を飲むに、一人の隅に郷むかひて悲泣する有れば、則ち一堂の人皆な之が爲に樂しまず、と）」とあり、古くから知られた成語だったようである。唐・嚴挺之「諫安福門酺宴疏」にも、「且一人向隅、滿堂不樂（且もし一人隅に向かはば、滿堂樂しまず）」とある（『全唐文』卷二八〇）。

○小人 へりくだった自称。前出『唐人称谓』九六頁。

○不自量 身の程を知らない。「自量」は、自ら自己の力量才能をはかり知る。『三国志』卷一九・魏書・陳思王植伝および『文選』卷三七・曹植「求自試表」に、「竊不自量、志在效命、庶立毛髮之功、以報所受之恩（窃かに自ら量らず、志命を効すに在り。庶こひねがはくば毛髮の功を立て、以て受くる所の恩に報いんことを）」とある。

○金玉之聲 他人の声や詩歌文章を褒めていう言葉。南朝宋・顔延之「秋胡詩」に「義心多苦調、密比金玉聲（義心苦調多く、密かに金玉の声に比す）」（『文選』卷二二）。また、唐

・韋応物「答河南李士巽題香山寺」に「遠蒙惻愴篇、中有金玉聲（遠く惻愴の篇を蒙れば、中に金玉の声有り）」（『全唐詩』卷一九〇）。

○冤抑 無実の罪におちいる。不当な仕打ちにやりきれない思いをする。『楚辞』東方朔・七諫「怨世」に「獨冤抑而無極兮（独り冤抑されて極まり無し）」。「河東記」では、「盧從事」（卷四三六・畜獸三・馬）に「忽人語、必有冤抑之事（忽ち人語せるは、必ず冤抑の事有らん）」がある。

○控訴 訴える。『太平広記』では、この一例のみ。唐・柏虔冉「新創千金陂記」に「窮民焦號、無所控訴（窮民は焦号せるも、控訴する所無し）」とある（『全唐文』卷八〇五）。

○舉金爵 「金爵」は、杯の美称。『太平広記』では、この一例のみ。唐・羅鄴「冬日寄獻庾員外」に「爭歡酒蟻浮金爵、從聽歌塵撲翠蟬（飲を争つて酒蟻は金爵に浮かび、聴に従ひて歌塵は翠蟬を撲つ）」とある（『全唐詩』卷六五四）。「舉爵」

「舉杯」は、杯を手にして酒を飲む。なお、唐代の宴席での行酒は、坐客の銘々に順次酒を注ぎ、注がれた者はその際に飲むのが習わしであった。石田幹之助「唐代風俗史抄」の注一、および「唐代燕飲小景」に考証がある（両論文は共に『増

訂長安の春』に所収。同書は一九六七年に、平凡社より東洋文庫の一冊として刊行）。「唐代燕飲小景」では、こうした酒宴の様子を示す格好の資料として、後の【参考】に示した「張生」の話が挙げられている。

○收泣 涙をおさえる。「收淚」に同じ。『河東記』では、「臧夏」（卷三四六・鬼三一）に「收泣而去（泣を収めて去る）」がある。

○今夕何夕 『詩経』国風・唐風・「綢繆」の「今夕何夕、見此良人（今夕は何の夕べぞ、此の良人を見る）」にもとづく。杜甫に「今夕行」があり、「今夕何夕歳云徂、更長燭明不可孤（今夕は何の夕べぞ 歳は云に徂く、更長く燭明らかにして 孤なるべからず）」と詠い出されている（『杜詩詳註』卷一、『全唐詩』卷二一六）。なお、この詩は「獨孤遐叔妻白氏」と題して、『全唐詩』卷八六八に収められている。（字句の異同はなし。）

○良人去今天之涯 「良人」は夫。この句は、「古詩十九首」第一首の、「相去萬餘里、各在天一涯（相ひ去ること万余里、各おの天の一涯に在り）」に発想を借りていよう（『文選』卷二九）。

○園樹傷心兮三見花 この句は、宋の范成大「春思」にその

まま取り入れられ、「園樹傷心兮三見花、依舊銀屏夢千里（園樹傷心して三たび花を見、旧に依りて銀屏に夢千里）」とある（『石湖詩集』卷三）。「獨孤遐叔」がよく知られた話であったことを示す事例であろう。

○轉面 顔の向きをかえる。ここでは顔を背ける意。『太平広記』では、卷四二九・虎四「王用」に「久乃轉面（久しくして乃ち面を^{おもて}転じ）」、四八七・雜伝記四「霍小玉傳」に「玉乃側身轉面、斜視生良久（玉乃ち身を^{そばだ}側て面を転じ、斜めに生を視ること良や久しうし）」などの例がある。

○揮涕 涙をはらう。揮淚。『太平広記』にも八例ほど。

○驚憤 驚き憤慨する。新羅の崔致遠「奏請叛卒鹿晏宏授興元節度使狀」に「臣久竊寵光、深懷驚憤（臣久しく寵光を窃み、深く驚憤を懷ふ）」、「答浙西周司空書」に「忽覽來示、驚憤兩深（忽ち來示を覽て、驚憤両つながら深し）」とある（『唐文拾遺』卷三六、三八）。他に唐代以前の用例が見当たらず、『太平広記』もこの一例のみ。

○計無所出 （対処しようにも）策が思い浮かばない。『三国志』蜀書卷一一・譙周伝に「後主使羣臣會議、計無所出（後

主群臣をして會議せしむるも、計の出づる所無し）」とあるなど、よく用いられる表現。『太平広記』中にも散見され、卷二七・神仙二七「唐若山」をはじめ、十八話に見える。

○階陛 きざはし。階段。常用の語であるが、『太平広記』では他に三例。

○捫 にぎる。持つ。

○磚 「輒」に同じ。しきがわら。

○纔 動作や行為が起こったばかりであることを示す。「たつたいまゝしたばかり」。

○悄然 静まりかえつて物音一つしないさま。常用の語で、『太平広記』には二十例ほどが見られる。『河東記』ではこの一例のみ。

○一無所有 常用の語で、『河東記』の「胡媚兒」（卷二八六・幻術三）にも「求之、一無所有（之を求むるも、一として有る所無し）」とある。

○悵然 失意のさま。いたみ恨むさま。これも常用の語で、『河東記』では「盧佩」（卷三〇六・神一六）、「申屠澄」（卷四二九・虎四）にも。

○悲惋 かなしみなげく。うらみななしむ。「惋」は、なげく、

うらむ、おどろきうらむ。『太平広記』では、卷一五九・定数一四・婚姻「武殷」（出典は唐・鍾籙『前定録』）の「言訖、相對而泣、因驚覺悲惋、且異其事（言訖^をはり、相ひ対して泣き、因りて驚覺悲惋し、且つ其の事を異とす）」をはじめとして八例。なお「悵然悲惋」の四字句は、他に用例が見当たらない。

○速駕 乗物の速度をはやめる。『周書』卷一・帝紀第一・文帝上に「吾便速駕直赴京邑（吾は便ち駕を速め、直ちに京邑に赴かん）」とある。『太平広記』ではこの一例のみ。

○悽咽 悲しみ鳴咽する。『太平広記』では、他に卷一〇一・釈証「雞卵」（出典は唐・張説『宣室志』）の「聲甚悽咽、似有所訴（声は甚だ悽咽にして、訴ふる所有るに似たり）」をはじめとして三例。なお、「步步悽咽」の四字句は、他に用例が見当たらない。

【原文】 4

比平明、至其所居、使蒼頭先入、家人並無恙。遐叔乃①驚愕、疾走入門、青衣報娘子夢魘方寤。遐叔至寢、妻臥猶未興。良久乃曰、向夢與姑妹之黨、相與翫②月、出金光門外、向一

野寺、忽爲凶暴者數十輩、脇與雜坐飲酒。又說夢中聚會言語、與遐叔所見並同。又云、方飲次、忽見大磚飛墜③、因遂驚魘殆絶。纔寤而君至。豈幽憤之所感耶。 出河東記

【訓読】 4

平明に比^{およ}びて、其の居る所に至り、蒼頭をして先づ入らしむるに、家人は並びに恙無し。遐叔乃ち驚愕し、疾走して門に入るに、青衣娘子の魘^{えん}を夢みて方に寤^さむるを報ず。遐叔寢に至るに、妻は臥して猶ほ未だ興^{おき}きず。良^やや久しくして乃ち曰く、「向に姑妹の党と相ひ与に月を翫^めで、金光門外に出て、一野寺に向かふを夢むるに、忽ち凶暴なる者数十輩の爲に、脇^{おし}されて与に雜坐して酒を飲む」と。又た夢中の聚會の言語を説くに、遐叔の見る所と並びに同じ。又た云ふ、「方に飲まんとする次に、忽ち大磚の飛墜せるを見、因りて遂に魘に驚き殆んど絶^たえんとす。纔^{わづ}かに寤むるに君至れり」と。豈に幽憤の感ずる所ならんや。 『河東記』に出づ。

【訳】 4

夜明けに家にたどり着き、下僕を先に入らせると、家族は皆何事もなかった。遐叔は驚き、なかに駆け込んだところ、下女が「奥様が夢に魘^{うな}されて、今お目覚めになったところ

す」と知らせた。遐叔が寝室に行くと、妻は横になってまだ起き出さずにいた。ややあつて妻はこう言った、「先ほど夢を

見まして、叔母たちと一緒に月を愛で、金光門の外に出て、野中の寺に向かったのですが、不意に乱暴者数十人に捕まり、脅されて座を交えて酒を飲むことになってしまいました」と。また夢の中での宴会の遣り取りを話すと、遐叔が見たところといずれも同じであつた。妻はまた言った、「お酒を飲もうとした折に、不意に大きな敷瓦が飛んでまいりました。悪夢に死ぬほど驚き、やっと目覚めたばかりのところ、貴方がいらつしやつたのです」と。これは心中に鬱積した気持ちが感応したためではないだろうか。『河東記』に出る。

【校記】 4

①「乃」、会校本校記に「孫本・沈本作『反』」とある。

②「翫」、四庫本・筆記本は「玩」に作る。なお、『類説』『歳時広記』『説郛』『雪窓談異』『艷異編』『古今説海』『太平広記鈔』『燕居筆記』『緑牕女史』『香艷叢書』は「玩」に作る。

③「墮」、会校本校記に「沈本作『墮』」とある。なお、『歳時広記』『説郛』『雪窓談異』『艷異編』『古今説海』『五朝

小説』『燕居筆記』『緑牕女史』『唐代叢書』『龍威秘書』『香艷叢書』も「墮」に作る。

【注】 4

○平明 夜明け。『河東記』では、他に「黒叟」（巻四一・神仙四一）に一例。

○蒼頭 召使い。下男。『河東記』では、他に「段何」（巻三四九・鬼三四）に一例。

○家人 一家の人。家族。常用の語で『太平広記』にも頻見される。『河東記』では、「鄭馴」（巻三四一・鬼二六）、「蘊都師」（巻三五七・夜叉二）、「崔紹」（巻三八五・再生一一）、「辛察」（巻三八五・再生一一）に見える。妻の意味で用いられることもあるが、本話の場合は明らかに家族を指す。

○無恙 無事である。『太平広記』にも頻見されるが、『河東記』ではこの一例のみ。

○娘子 前出『唐人称谓』によれば、既婚あるいは未婚の女性の通称で、主婦に対する尊称としても用いられる（一〇〇〜一頁）。また江藍生・曹広順『唐五代語言詞典』（上海教育出版社、一九九七年）によれば、広く女性を指し、女主人の意味にも用いる（二六四頁）。『太平広記』にも頻見され、『河

『東記』では、「板橋三娘子」（巻二八六・幻術三）をはじめとして、「盧佩」（巻三〇六・神一六）、「成叔弁」（巻三四四・鬼二九）、「韋齊休」（巻三四八・鬼三三）、「蘊都師」（巻三五七・夜叉二）、「申屠澄」（巻四二九・虎四）にも用例が見える。

○夢魘 悪夢にうなされる。夢厭。「魘」は、悪夢にうなされる。『河東記』の用例として、「臧夏」（巻三四六・鬼三一）に「與其兄咸嘗晝寢、忽夢魘、良久方寤（其の兄の咸と与に嘗て昼寝ぬるに、忽ち魘を夢み、良久しくして方めて寤む）」とある。『太平広記』では、この二例のみ。

○姊妹 父の妹。叔母。『春秋左氏伝』襄公十二年「無女而有姉妹及姊妹」疏に「父之妹爲姊妹（父の妹を姊妹と爲す）」。

『太平広記』では、この一例のみ。

○翫月 月を愛でる。月を鑑賞する。『太平広記』では、巻二二・神仙二二「羅公遠」（出典は前蜀・杜光庭『神仙感遇伝』『仙伝拾遺』、唐・盧肇『逸史』ほか）をはじめとして、六例。

○脇 おどす。「脇」は、もともと「脅」の異体字。

○雜坐飲酒 男女が入り乱れて坐するのは、礼を失した行為。『太平広記』巻四四〇・畜獸七・鼠「盧樞」に、「男女雜坐飲酒（男

女雜坐して飲酒す）」の語が見える（出典は宋・徐鉉『稽神録』）。

○方飲次 「次」は、「ちようど……している時に」。入矢義高監修・古賀英彦編著『禪語辞典』（思文閣出版、一九九一年）によれば、「……した時」「……した機会に」の意で、伝統的な訓読は「…次いで」とある（一七八頁）。前出の江藍生・曹広順『唐五代語言詞典』では、④番目の意味として「用在動詞后面、表示動作正在進行、相当于“正……時”“……時”」を挙げ、元稹の詩「出門行」や『祖堂集』の例を引く（六九頁）。『太平広記』では、他に三例。巻二八二・夢七の「張生」に二例が見え、「賓客五六人、方宴飲次（賓客五六人、方に宴飲せる次なり）」、「方飲次、外有發瓦來（方に飲まんとする次、外より瓦を發して來たる有り）」とある。（なおこの話は、【參考】において取り上げるように、「獨孤遐叔」の類話。）いま一つは、巻二八六・幻術三の「板橋三娘子」で、『河東記』所載の話。「方飲次、三娘子送茶出來（方に飲まんとする次、三娘子 茶を送りて出で來たる）」とある。

○驚魘 悪夢に驚かされる、うなされる。『太平広記』では、他に巻二一〇・画一の「黃花寺壁」（出典は撰者不詳『山林登

博物志』、および卷三九〇・塚墓二「張式」(出典は唐・薛用弱『集異記』)の二話に用例が見える。

○纒 ……したばかり。既出。

○幽憤 心中に鬱積した怨憤。『太平広記』には四例。卷四四八・雜伝記五の元稹「鶯鶯傳」に「心遁身退、拜會無期、幽憤所鍾、千里神合(心は遁く身は退かにして、拜会は期無きも、幽憤の鍾^{あつ}まる所、千里も神合せん)」とある。思いの丈が募れば、遠く離れた心を通わせることが出来るという考えは、本話とも共通するものを持つ。また、唐・段成式『酉陽雜俎』前集卷八・夢には、李鉉『李子正辯』なる書を引いて「至精之夢、則夢中身人可見、如劉幽求見妻、夢中身也(至精の夢にては、則ち夢中の身も人見るべし、劉幽求の妻を見るが如きは、夢中の身なり)」とある。例として挙げられた「劉幽求見妻」は、本話の類話の一つ【参考】参照)で、これを論拠に至純の夢の場合、夢中の人物の身体を他人も見ることが出来ると述べている。当時の「夢」観を示す資料として興味深い。

ところで末尾の「豈幽憤之所感耶」については、撰者薛漁思の言葉と取らず、退叔の妻の言葉とする解釈もある。『太平

広記』の現代中国語全訳三種、および王汝濤編校『全唐小説』(山東文芸出版社、一九九三年)二五一八頁、陶敏主編『全唐五代筆記』(三秦出版社、二〇一二年)第二冊一〇七三頁は、いずれも妻の言葉としており、李劍国主編『唐宋伝奇品読辞典』(新世界出版社、二〇〇七年)上冊五五四頁、および前掲の李劍国輯校『全唐五代小説』(中華書局、二〇一五年)第三冊一二九三頁も同様である。邦訳も、後述の田村初訳と志村五郎訳【参考】参照)は、文末までを妻の言葉とする。ただ、一篇の締め括りとしては、薛漁思の言葉とした方が落ち着くのではないだろうか。『太平広記』会校本の句読をはじめ、李時人編校・何満子審定『全唐五代小説』(陝西人民出版社、一九九八年)や袁閭琨・薛洪勳主編『唐宋伝奇総集』(河南人民出版社、二〇〇一年)が、妻の言葉を「纒寤而君至」までとしているのは、そのためであろう(上冊四八〇頁/第二冊一〇三三頁)。邦訳では、前掲(注1「取是夕及家」の項参照)の今場・尾崎共訳が、この読解を取る。因みに『河東記』では、他に一例のみであるが「李敏求」(卷一五七・定数一二二)も、こうした撰者の感慨で結ぶ終わり方をしている。

なお、「豈幽憤之所感耶」を撰者の言葉と取る読解は、早く

から諸書の引用にも窺われる。例えば宋・陳元靚『歲時広記』の引用では、末尾は「…、遂驚寤殆絶、纔寤而君至。其所言夢中聚會談話、與遐叔所見並同。豈幽憤之所感耶。」と結ばれている。つまり「又說夢中聚會言語、與遐叔所見並同」の一節が後置されることによって、妻の言葉は「良久乃曰」以下から「纔寤而君至」までで終わり、「豈幽憤之所感耶」は明らかに撰者の言葉となっているのである。また明・馮夢龍『太平広記鈔』は、「…、因遂驚寤殆絶。纔寤而遐叔至、豈幽憤之所感耶。」と、「君至」を「遐叔至」に改めている。これによって、「纔寤而…」を含めた二句が地の文となる。いずれも一篇の作品としての収まりを良くしようとしての改変と考えられる。

【参考】

「獨孤遐叔」は、【校記】1で触れたように諸書に引かれており、広く知られた話だったようである。以下、本話を採録する文献を管見の範囲で列挙しておく。

北宋・曾慥『類説』卷五〇

（出典を『縉紳脞説』とし、「獨孤妻夢翫月」と題す。

節録）

南宋・陳元靚『歲時広記』卷一七

（出典を『河東記』とし、「驚妻夢」と題す。節録）

元・陶宗儀『說郛』卷一一五

（出典を『夢遊録』とし、全文）

明・楊循吉『雪窓談異』卷一

（出典を『夢遊録』とし、全文）

明・王世貞『艷異編』卷二二・夢遊部（全文）

明・陸楫『古今說海』說淵部・別伝三

（出典を『夢遊録』とし、全文）

明・馮夢龍『太平広記鈔』卷五一（節録）

明・馮夢龍編、明・余公仁批補『增補批点図像燕居筆記』

卷八・記類（「獨孤遐叔記」と題し、全文）

明・闕名（桃源居士）『五朝小説』唐人百家小説

（出典を『夢遊録』とし、全文）

明・闕名（秦淮寓客）『綠牕女史』卷六・冥感上・夢寐

（「見夢記」と題し、全文）

清・陳世熙輯、王文誥補輯『唐代叢書（唐人説薈）』

（出典を『夢遊録』とし、全文）

清・馬駿良『龍威秘書』四集

（出典を『夢遊録』とし、全文）

清・闕名（虫天子）『香艷叢書』七集卷四

（出典を『夢遊録』とし、全文）

この他、地方誌の『陝西通志』（清・劉於義等監修、儲大文等編纂）卷三〇・選舉一・進士・唐には、「獨孤遐叔、長安人」と記載があり、卷一〇〇・拾遺三・神異には『夢遊録』からの引用として本話を節録する。また李劍国『唐五代伝奇集』（中華書局、二〇一五年）によれば（一二九三～四頁）、明・冰華居士『合刻三志』志夢類、明・鍾人傑、張遂辰『唐宋叢書』、清・馬駿良『晋唐小説暢觀』にも収録されているという（いずれも出典は『夢遊録』）。

類話については、唐の白行簡「三夢記」の「劉幽求」、李玫『纂異記』の「張生」が知られている。汪辟疆『唐人小説』（神州国光社、一九三一年）の「三夢記」注に指摘がある（一九七八年刊の上海古籍出版社重版本では、一一〇～一二頁）が、早くは明・胡應麟『少室山房筆叢』に、「三夢記」を取り上げ、ての言及が見られる（卷三六）。魯迅『唐宋伝奇集』稗辺小

綴」は、『少室山房筆叢』のこの言及を引いて「三夢記」を論じている（『魯迅全集 第十卷』人民文学出版社、一九八一年、九七頁）。

これら三話は、共に次のようなあらすじで、極めてよく似ている。

主人公の男性が、旅先で夜宴を覗き見る。すると談笑する女性達の中に妻がいる（あるいは、宴席で妻が男に絡まれている）。そこで怒りを抑えきれず瓦を投げつけると、すべてがかき消えてしまう。急ぎ家に帰り、妻に話を聞いたところ、夢の中で瓦を投げつけられ、驚いて目が覚めたという。

明らかに源を同じくするものであろうが、「三夢記」の成立が最も早く（白行簡は中唐、李玫と薛魚思は共に中唐末から晩唐にかけての人）、また内容も簡略なことからすると、胡應麟が指摘するようにこれが原話と考えられる。参考資料として「三夢記」の「劉幽求」、『纂異記』の「張生」、および胡應麟『少室山房筆叢』の記事を、左に掲げておく。

◎唐・白行簡「三夢記」其一「劉幽求」（文淵閣四庫全書本『説郛』卷一一四による）

人之夢、異於常者有之。或彼夢有所往而此遇之者、或此有所爲而彼夢之者、或兩相通夢者。天后時、劉幽求爲朝邑丞。嘗奉使歸、未及家十餘里、適有佛堂寺、路出其側。聞寺中歌笑歡洽。寺垣短缺、盡得觀其中。劉俯身窺之、見十數人、兒女雜坐、羅列盤饌、環繞之而共食。見其妻在坐中語笑。劉初愕然、不測其故久思之。且思其不當至此、復不能捨之。又熟視容止言笑、無異。將就察之、寺門閉不得入。

劉擲瓦擊之、中其疊洗、破迸走散、因忽不見。劉踰垣直入、與從者同視、殿廡皆無人、寺扃如故。劉訝益甚、遂馳歸。

比至其家、妻方寢。聞劉至、乃敘寒暄訖、妻笑曰、向夢中與數十人同遊一寺、皆不相識。會食於殿庭、有人自外以瓦礫投之、杯盤狼藉、因而遂覺。劉亦具陳其見。蓋所謂彼夢有所往而此遇之者矣。

◎唐·李玫『纂異記』所收「張生」（中華書局本『太平廣記』卷二八二·夢七·夢遊下による）

有張生者、家在汴州中牟縣東北赤城坂。以饑寒、一旦別妻子遊河朔、五年方還、自河朔還汴州。晚出鄭州門、到板橋、已昏黑矣。乃下道、取陂中徑路而歸。忽於草莽中、見燈火熒煌、賓客五、六人、方宴飲次。生乃下驢以詣之、相去

十餘步、見其妻亦在坐中、與賓客語笑方洽。生乃蔽形于白楊樹間、以窺之。見有長鬚者持杯、請措大夫人歌。生之妻、

文學之家、幼學詩書、甚有篇詠。欲不爲唱、四座勤請、乃

歌曰、歎衰草、絡緯聲切切、良人一去不復還。今夕坐愁鬢

如雪。長鬚云、勞歌一杯。飲訖、酒至白面年少、復請歌。

張妻曰、一之謂甚、其可再乎。長鬚持一籌筴云、請置觥。

有拒請歌者、飲一鍾。歌舊詞中笑語、准此罰。于是張妻又

歌曰、勸君酒、君莫辭。落花徒繞枝。流水無返期。莫恃少

年時。少年能幾時。酒至紫衣者、復持杯請歌。張妻不悅、

沈吟良久、乃歌曰、怨空閨、秋日亦難暮。夫婿斷音書。遙

天雁空度。酒至黑衣胡人、復請歌。張妻連唱三四曲、聲氣

不續。沈吟未唱間、長鬚拋觥云、不合推辭。乃酌一鍾。張

妻涕泣而飲、復唱送胡人酒曰、切切夕風急、露滋庭草濕。

良人去不回、焉知掩閨泣。酒至綠衣少年、持杯曰、夜已久。

恐不得從容。即當睽索。無辭一曲。便望歌之。又唱云、螢

火穿白楊、悲風入荒草。疑是夢中遊、愁迷故園道。酒至張

妻、長鬚歌以送之曰、花前始相見、花下又相送。何必言夢

中、人生盡如夢。酒至紫衣胡人、復請歌云、須有艷意。張

妻低頭未唱間、長鬚又拋一觥。於是張生怒、捫足下得一瓦、

撃之、中長鬚頭。再發一瓦、中妻額、闕然無所見。張君謂其妻已卒、慟哭連夜而歸。及明至門、家人驚喜出迎。君〔會校本作「張君」、校記曰、「原無此字、現據沈本補」〕問其妻、婢僕曰、娘子夜來頭痛。張君入室。問其妻病之由、曰、昨夜夢草莽之處。有六七人、遍令飲酒、各請歌。孥凡歌六七曲、有長鬚者頻拋觥。方飲次、外有發瓦來。第二中拏額、因驚覺、乃頭痛。張君因知昨夜所見、乃妻夢也。出纂異記◎明・胡應麟『少室山房筆叢』卷三六・己部・二西綴遺中（一九八五年中華書局刊、明清筆記叢刊本による）

白行簡三夢記云、天后時、劉幽求爲朝邑承掌。奉使歸。未及家十餘里、適有佛堂院落出其側。寺中歌笑歡洽。寺垣短缺尺、得睹其中。劉俯身窺之、見十數人兒女雜坐、羅列盤饌、環遶而共食之。見其妻在坐中語笑。劉初愕然、不測其故。久之且思其不當至此、復不能捨之。又熟視容止言笑、無異。將就察之、寺門閉不得入。劉擲瓦擊之、中其疊、諸人迸走散、因忽不見。劉踰垣直入、與從行者視、殿廡皆無人、寺局如故。劉訝益甚、遂馳歸。比至其家、妻方寢。聞劉至、及叙寒暄訖、妻笑曰、向夢中與數十人同遊一寺、皆不相識。會食訖、殿庭中有人自外以瓦礫投之、杯盤狼籍、

因而遂覺。劉亦具陳其見。與夢符合、不爽毫髮云。右載陶氏說郛。太平廣記夢類數事、皆類此。此蓋實錄、餘悉祖此假託也。

「三夢記」の「劉幽求」については、先の注4で触れた『西陽雜俎』の一条があるので、これも附載しておくことにする。なお同文は、『太平広記』卷二八二・夢七・夢遊下「段成式」に、夢に関する彼の他の言葉と併せて引かれ、若干の字句の異同がある。

◎唐・段成式『西陽雜俎』前集卷八・夢

李鉉著李子正辯、言至精之夢、則夢中身人可見。如劉幽求見妻、夢中身也。則知夢不可以一事推矣。愚者少夢、不獨至人、問之騶皂、百夕無一夢也。

李鉉という名の人物に関しては、北斉の儒者李鉉が知られ、『北斉書』卷四四・儒林伝に記事が載る。その中に『字辨』と題する一書を著したとあり、これをもとに許逸民『西陽雜俎校箋』（中華書局、二〇一五年）は、「正辯」を「字辨」の誤りとする（六八一頁）。しかし、『宋史』卷二〇五・芸文志四・子部雜家類に、「李子正辨十卷」の一条が見える。撰者名は記されていないが、『李子正辯』とは、むしろこれを指すの

ではないだろうか。劉伝鴻『西陽雜俎』考証・兼字詞考釈（北京大学出版社、二〇一四年）も、『宋史』芸文志を注に引いている（一六三頁）。ただ、今村与志雄訳注『西陽雜俎』（東洋文庫・平凡社、一九八〇年）は、『北齊書』を引いた後、「しかし、劉幽求の話が、もし、『李子正辯』中にあるとすれば、李鉉は、北齊の李鉉とは、別人ということになる」と注記する（第二冊一二八―九頁）。とすれば、『李子正辯』の引用箇所の問題と絡んで、なお検討の余地は残ることになる。今場・尾崎『『太平広記』夢部訳注』は、引用を劉幽求の前までとして訳出した上で、注記において今村説を紹介している（三〇七―八頁）。

時代を降つての翻案作品としては、李劍国『唐五代志怪传奇叙録』が指摘する（下冊六三六頁）、明・馮夢龍『醒世恒言』卷二五「獨孤生歸途鬧夢」、明・葉憲祖『龍華夢』雜劇がある。『龍華夢』は、明・祁彪佳『遠山堂明劇品』雅品に「龍華夢南北四折 葉憲祖」として挙げられ、梗概が次のように記される。「白娟娟之夢至獨孤生於龍華寺目擊之、及獨孤歸而娟娟之夢未已也。異哉。南柯、邯鄲之外、又闢一境界矣（白娟娟

の夢 獨孤生の龍華寺に於いて之を目撃するに至り、獨孤歸るに及ぶも娟娟の夢は未だ已まざるなり。異なるかな。南柯、邯鄲の外に、又た一境界を闢^{ひら}けり」。ただ、現在には伝わらないようで、黄裳『遠山堂明曲品劇品校録』（上海出版公司、一九五五年）は「未見著録」とする（一七七頁）。また清・蒲松齡『聊齋志異』卷二の「鳳陽士人」も、これらの話をもとにしており（前掲の魯迅『稗辺小綴』に指摘がある）、朱一玄編『《聊齋志異》資料匯編』（中州古籍出版社、一九八五年）は、同作品の項に上記三話を挙げる（五九―六四頁）。

なお、二人の人物が同じ夢を見る話については、今場正美「二人同夢——志怪・伝奇における夢の役割——」（『学林』第四五号、二〇〇七年）の論考がある。それによれば、二人同夢は、古く『春秋左氏伝』の次の二話にまで遡ることができ。一つは襄公十八年秋の記事で、晋の中行献子が斉との戦いを前に夢を見る。それは、嘗て弑した厲公に首を切り落とされ、その首を拾って逃げる途中、巫臯に遇ったというものの。数日後、巫臯に話すと、彼も同じ夢を見たと言い、献子の戦勝とその後遠くない死を予言する。結果は夢占いの通りになる。もう一つは、昭公七年九月の記事で、衛の孔成子と

史朝が同じ夢を見、夢中の勸告に従って衛国の世継ぎを決める話。

六朝の志怪小説では、晋・干宝『搜神記』に二話がある。

巻五の韓伯・王蘊・劉耽の息子達の話は、蒋山廟に遊んだ三人が、酔った勢いで廟中の婦人像に戯れて自分の嫁にと言う。すると三人の夢に蒋侯が現れて彼等を招喚し、程なく三人共に死去したというもの。巻一〇の謝奉の話は、水死した友人郭伯猷の葬式を出す夢を見た謝が、郭にそれを話すと、彼もまた同じ夢を見たと言ったというもの。郭はしばらくして廁に立つが、突然倒れて息絶えてしまい、謝は夢の通り彼の葬儀の道具を調べてやることになる。他に晋・陶潜『搜神後記』には、巻三の桓哲と梅玄龍の話がある。病床の梅玄龍を見舞った桓哲が、冥府の下吏となった自分が泰山府君となる梅を迎える夢を見る。それを梅に伝えると、彼もまた喪衣の桓を迎えに来た夢を見たと言ったというもの。数日後に二人はまた同じ夢を見、桓哲が死ぬと翌日には梅玄龍も亡くなる。

以上、いずれも夢の予兆、予告の要素を織り込み、死と結びつく話が多くを占める。降って唐代になると、二人同夢の話はさらに多様化して数を増してゆく（詳細は今場論文の第

三節および注①を参照）が、「三夢記」や「獨孤遐叔」の話は、そうした多様化の中で、予告・死との結びつきから離れた、新たな創意工夫の下に誕生していったと考えられる。

ところで、夫婦同夢の話は日本にも伝わっており、『今昔物語集』巻三一・本朝部の第九話「常澄安永、於不破関夢見語」^{つねずみのやすなが}（常澄安永、不破の関に於て夢を見る語）^{こと}、および一〇話「尾張国勾経方、妻事夢見語」^{をはりのくに まがりのつねかた}（尾張国の勾経方、妻事を夢に見る語）^{こと}が知られている。特に第九話の内容は、主人公が東国から帰京の途次に不破の関に宿り、妻が見知らぬ若者と関係する夢を見、その場に飛び込んだところで目が覚め、急ぎ帰宅すると妻も同じ夢を見たと言ったというもの。夫の方も夢を見る設定、妻と若者との不義等、異なる点はあるものの「三夢記」劉幽求の話と極めてよく似ている。影響関係が考えられてよい筈であるが、管見の『今昔物語集』諸訳注はいずれも典拠未詳として処理し、この点に言及していない。わずかに馬淵和夫・今野達『今昔物語集 本朝世俗部四』（完訳日本の古典三三・小学館、一九八八年）が、「原拠は不明ながら、この種の説話は、中国種のモチーフがわが国の類似的の民俗伝承と結びついて成立したもののように思われる」

と解説するのみである（一〇二頁）。「三夢記」劉幽求の話は、ここに言う「中国種のモチーフ」として取り上げられてよいように思う。また、時代をさらに江戸初期にまで降ると、浅井了意『伽婢子』巻三に、「張生」の翻案「妻の夢を夫^をと^まの^あた^りに見る」がある。

なお「獨孤遐叔」の邦訳としては、田村初『迷楼記 他十種』（支那文献刊行会、一九二五年）が早いものであろう。『夢遊録』中の一編として、この作品および「張生」が収められている（二六八〜七三頁、二八五〜八九頁）。ただ『夢遊録』は、唐の任蕃の撰と伝えられるものの、全て『太平広記』巻二八一〜二の夢遊類から作品を採取した偽書で、李劍国『唐五代志怪伝奇叙録』に考証がある（下冊「偽書弁証」一一六五〜六頁）。近來では、志村五郎『中国説話文学とその背景』（ちくま学芸文庫・筑摩書房、二〇〇六年）が訳出の上、類話についても言及する（二三〇〜三四頁）。また最近の刊行書に、前掲の今場正美・尾崎裕『太平広記』夢部訳注』（朋友書店、二〇一五年）があり、訳注を収める。中国では、これも前掲の李劍国主編『唐宋伝奇品説辞典』（新世界出版社、二〇〇七年）、李劍国輯校『全唐五代小説』（中華書局、二〇一五年）

が本話を収録し、「品説」あるいは「校注」を加えている。

（岡田充博）

第十四話 王錡（卷三百十・神二十）

【全文】

天興丞王錡。寶曆中。嘗遊隴州。道憩于大樹下。解鞍籍地而寢。忽聞道①騎傳呼自西來。見紫衣乘車。從數騎。敕左右曰。屈王丞來。引錡②至。則帳幄陳設已具。與錡坐語良久。錡不知所呼。每承言。即徘徊鹵莽。紫衣覺之。乃曰。某潦倒一任二十③年。足下要相呼。亦可謂爲王耳。錡曰。未論大王何所自。曰。恬昔爲秦築長城。以此微功。屢蒙重任。洎④始皇帝晏駕。某爲羣小所構⑤。橫被誅夷。上帝仍以長城之役。勞功害民。配守吳嶽。當時吳山有嶽號。衆⑥咸謂某爲王。其後嶽職却歸於華山。某罰配年月未滿。官曹移便⑦。無所主管。但守空山。人跡所稀。寂寞頗甚。又緣已被虛名。不能下就小職。遂至今空竊假王之號。偶此相遇。思少從容。錡曰。某名

跡幽沉。質性孱懦。幸蒙一顧之惠。不知何以奉教。恬曰。本緣奉慕。顧展風儀。何幸遽垂厚意。誠有事則又如何。錡曰。幸甚。恬曰。久閑⑧散。思有以効用。如今士馬處處有主。不可奪他權柄。此後三年。興元當有八百人無主健兒。若早圖謀。必可將領。所必奉託者。可致紙錢萬張。某以此藉手。方諧⑨矣。錡許諾而寤。流汗霰霏。乃市紙萬張以焚之。乃太⑩和四年。興元節度使李絳遇害。後節度使溫造。誅其凶黨八百人。

出河東記

【訓読】

天興の丞王錡、宝曆中に、嘗て隴州に遊ぶ。道に大樹の下に憩ひ、鞍を解き地に籍きて寝ぬ。忽ち聞く道騎の伝呼して西自り来たるを。紫衣の車に乗り、数騎を従ふるを見る。左右に敕して曰く、「王丞を屈し来たれ」と。錡を引ききて至れば、則ち帳幄の陳設已に具はる。錡と坐語すること良久し。錡呼ぶ所を知らず、言を承くる毎に、即ち徘徊すること鹵莽たり。紫衣之を覺り、乃ち曰く、「某は潦倒たりて一たび任ぜらるること二十年、足下相ひ呼ぶを要むれば、亦た謂ひて

王と為すべきのみ」と。錡曰く、「未だ大王は何の自りする所なるかを論らず」と。曰く、「恬は昔秦の為に長城を築き、此の微功を以て、屢しば重任を蒙る。始皇帝の晏駕するに洎び、某群小の構ふ所と為り、横に誅夷せらる。上帝仍りて長城の役の、功を勞し、民を害するを以て、吳岳に配守せらる。当時吳山に岳号有り、衆咸某を謂ひて王と為す。其の後岳職は華山に却歸するも、某の罰配の年月未だ滿たず。官曹は移便し、主管する所無く、但だ空山を守るのみ。人跡稀なる所、寂寞頗る甚だし。又た已に虚名を被るに縁り、下りて小職に就くこと能はず、遂に今に至るまで空しく仮王の号を窃む。偶たま此に相ひ遇ひ、少しく従容せんと思ふ」と。錡曰く、「某の名跡幽沈にして、質性孱懦たり。幸ひに一顧の恵を蒙るも、何を以て奉教するかを知らず」と。恬曰く、「本とより奉慕するに縁る。風儀を展ぶるを顧みるに、何ぞ幸ひにも遽かに厚意を垂る。誠し事有れば、則ち又た如何」と。錡曰く、「幸甚なり」と。恬曰く、「久しく閑散たり。思ひは効用を以てする有り。如今の士馬処々に主有り、他の権柄を奪ふべからず。此の後三年、興元当に八百人の主無き健兒有るべし。若し早かに図謀すれば、必ず將領すべし。必ず奉託

する所の者は、紙銭万張を致すべし。某此を以て藉手すれば、方に諧かなはんとす」と。錡許諾して寤さむ。流汗霰ばくばくたり。乃ち紙万張を市かひ以て之を焚く。乃ち太和四年、興元節度使李絳害に遇ふ。後節度使温造、其の凶党八百人を誅す。河東記に出づ。

【訳】

天興県丞の王錡は、宝曆年間のころに隴州へ旅した。道中、大木の下で休憩をとり、鞍を外して地面に置いて寝た。すると突然、先払いが声を上げてふれ回りながら、道を西から来るのが聞こえた。紫の衣の人物が車に乗り、騎馬数騎を率いているのが見えた。紫衣の人物が、側近の者に命令して言った、「王丞殿をお招きしろ」と。王錡を連れて到着したところには、もう迎接用の幕が設けられていた。王錡とともに座って話することしばらく、王錡は相手を何と呼んだらよいのかわからず、話かけられるたびに、返答をためらった。紫衣の人物はそれに気付き言った、「私は役職について二十年、何のすべきこともなく過ぎた。貴殿が私を呼ぶには、ただ「王」とだけ言えばよい」と。王錡は言った、「どちらの大王様でございますいましょうか」と。紫衣の人物が答えて言った、「私は昔、

秦のために長城を築き、この功績によって、しばしば重要な仕事を任せられた。始皇帝が崩御されると、君側の奸から害を受け、讒言を蒙り、誅殺されてしまった。そして死後、天帝は私の長城での働きと民を苦しめた罪とを斟酌して、私を呉岳に配流し守護させた。当時、呉山には岳号があつて、人々は皆、私を「王」と呼んだ。その後、王の権能は華山へ移つたが、私の罪を償う期間はまだ明けていなかった。官吏は移動し、配下もなく、ただ人気のない寂しい山を守ることとなり、人が来るのも稀で、ひっそりとして淋しいことこのうえない。また、すでにうわべだけは立派だが実質の伴わない「王」という名を戴いてしまったために、位の低い官職に就きたいと思つてもできず、とうとう今に至るまで、名前だけの「王」の称号を託かつことになった。偶然にもここで貴殿と出会つたので、少しばかりあなたとゆつくりお話ししたいと思つたのだ。」と。王錡は言った、「私の名声や業績は取るに足らず、性格は臆病で軟弱です。幸いなことにあなたにお会いできましたが、私はどのようにご期待に沿えばよいのか分かりません。」と。恬は言った、「もともと私は貴殿のことを敬仰していた。実際に会つてお姿を見てみれば、やはりすぐさ

ま親切にしてください。もし私に何かあれば、助けていたで
けるか。」と。王錡は言った、「私でお役に立てるならば、光
栄でございます。」と。恬は言った、「長いことすることもな
く暇でいた。だから役に立つことをしようと思う。現在の兵
馬にはどれもきまった主人がおり、他の人の支配下にあるも
のを奪うことはできない。三年後、興元にきつと八百人の主
人のいない兵士たちがいることだろう。もし、速やかに計画
を行えば、きつと彼らを統率することができよう。貴殿
にお願ひするのは、紙錢を一万枚、供えてもらいたいとい
うことだ。私がこれに助けられれば、願ひはきつとかなう。」と。
王錡がそれを承諾すると、目が覚めた。汗が流れて雨のよう
だった。そうして、紙錢を一万枚買って、これを焚きあげた。
すると太和四年、興元節度使の李絳が、殺されるという事件
が起こった。その後任となった節度使の温造は、李絳を害し
た反逆者たち八百人を討伐した。『河東記』に出る。

【校記】

①「道」、会校本は「導」に作り、校記に「原作『道』。現據
沈本改」という。

②「引錡」、会校本は「遂引錡」に作り、校記に「原無此字」。

現據沈本補」という。

③「任二十」、会校本校記に「沈本作『往二千』とある。

④「洎」、会校本校記に「沈本作『値』とある。

⑤「構」、会校本は「構」に作り、校記に「原作『御名』。爲
避南宋高宗諱（構）。現據孫本改」という。黄本も「御名」
に作る。四庫本、筆記本は「構」に作る。

⑥「衆」、会校本校記に「沈本作『衆人』とある。

⑦「便」、会校本は「更」に作り、校記に「原作『便』。現據
孫本改」という。

⑧「閑」、底本は「閑原作聞。據明鈔本改」と注記する。会校
本校記にも「原作『聞』。現據沈本改」という。

⑨「諧」、会校本校記に「沈本作『得』とある。

⑩「太」、会校本校記に「沈本作『大』とある。

【注】

○天興丞 「天興」は県名。今の陝西省鳳翔県の地。『太平広
記』には、卷一三六・徵応三「潞王」に「清泰即位、擢何叟
爲天興縣令（清泰即位し、何叟を擢んで天興の県令と爲す）」
（出典は後晋・王仁裕『王氏見聞録』）の用例がある。「丞」
は、県における令（長官）に次ぐ官職。

○王綺 『太平広記』には、他に登場せず、本話柄のみを伝えている。

○寶曆 唐、敬宗の時の年号（八二五〜八二七）。この年号は、

『河東記』には本話のみに出てくる。

○隴州 今の陝西省隴県。

○解鞍 馬上から鞍を外す。『河東記』では、他に「申屠澄」

（巻四二九・虎四）に一例。

○傳呼 声を伝えて叫ぶ、ふれ回る。『太平広記』では、巻一

八〇・貢拳三「牛錫庶」の「忽聞馳馬傳呼曰（忽ち聞く馬を馳せ伝呼して曰く）」（出典は唐・盧肇『逸史』）をはじめとして用例が多くあり、『河東記』では、「党國清」（巻三〇七・神一七）、「馬朝」（巻三一〇・神二〇）にも見える。

○紫衣 紫色の衣。唐代伝奇にあつては、「紫衣」は高位の貴人を表すことが多い。『新唐書』巻二四・車服志には、紫の衣服に關して、「袴褶之制、五品以上、細綾及羅爲之、六品以下、小綾爲之、三品以上紫、五品以上緋、七品以上緑、九品以上碧。（袴褶の制、五品以上、細綾及び羅もて之を爲り、六品以下、小綾もて之を爲る、三品以上は紫、五品以上は緋、七品以上は緑、九品以上は碧なり。）」とある。春秋戦国時代以降、

紫衣は貴人の着る衣裳であることから「朱紫」「金紫」の称があつた。冥界や異世界にあつても人間世界の制度が持ち込まれて、動物の化身や高貴の身分を象徴する。『河東記』でも、他に「李敏求」（巻一五七・定数一二）、「党國清」（巻三〇七・神一七）、「柳渢」（巻三〇八・神一八）、「許琛」（巻三八四・再生一〇）、「崔紹」（巻三八五・再生一一）、「李知微」（巻四四〇・畜獸七・鼠）の六話に見える。

○屈 招待する。招く。敬語の用法で、「請」と同じ意。『太平広記』巻一一・神仙一一「欒巴」の「欒巴者、蜀郡成都人也。少而好道、不修俗事。時太守躬詣巴、請屈爲功曹、待以師友之禮（欒巴なる者、蜀郡成都の人なり。少くして道を好み、俗事を修せず。時の太守躬ら巴に詣り、請屈して功曹と爲す。待するに師友の礼を以てす。）」（出典は『神仙伝』、『太平広記』巻四八九・雜伝記六「周秦行記」の「〔太后〕呼左右〔曰〕、屈二娘子出見秀才（〔太后〕左右を呼びて〔曰く〕、二娘子を屈して出でて秀才に見えしむ）」など用例は多い。

○帳幄 まく、あげばり、とばり。

○陳設 並び設ける、陳列。『河東記』では、他に「韋丹」（巻一一八・報応一七・異類）、「盧佩」（巻三〇六・神一六）、「蘊

都師」(卷三五七・夜叉二)の三話に見える。

○坐語 坐して語る。

○徘徊 ためらい躊躇する様。『唐五代語言詞典』(上海教育出版社、一九九七年)には、この部分を引用する。『河東記』では、他に「李自良」(卷四五三・狐七)に一例。

○鹵莽 はつきりしない様子。『太平広記』には、卷一六・神仙一六「張老」に「意甚鹵莽。(意甚だ鹵莽なり)」(唐・李復言『続玄怪録』、卷三六三・妖怪五「高郵寺」に「衣紅紫者、影中鹵莽可辨。(紅紫を衣る者、影中鹵莽たるも弁ずべし)」(出典は唐・段成式『酉陽雜俎』の二例がみとめられる。

○潦倒 落ちぶれる、碌々として何も成し得ないさま。『太平

広記』には、卷八三・異人三「張佐」に「子當嗤吾潦倒耳。(子当に吾が潦倒なるを嗤ふべきのみ)」(出典は唐・牛僧孺『玄怪録』、卷一八三・貢奉六「賈泳」に「賈泳潦倒可哀、吾當報之以德。(賈泳の潦倒哀れむべし、吾当に之に報ゆるに徳を以てすべし)」(出典は五代後漢・王定保『摭言』など三例の用例がある。

○所自 由来、来源。人間であれば、その人がその人である理由。『太平広記』には、卷三五・神仙三五「成真人」に、「成

真人者、不知其名、亦不知所自。(成真人なる者は、其の名を知らず、亦た自りする所を知らず)」とあるほか、卷四九二・雜伝記九「靈應傳」に、「余惚恍不知所自。(余惚恍として自りする所を知らず)」とある。他に「不知所之」あるいは「不知所適」「不知所往」「不知所措」「不知所謂」「不知所來」などの類似の言い方が認められる。

○恬 蒙恬(？前二一〇)は、秦の始皇帝に仕えた将。斉を攻めて功績があり、万里の長城の修築や九原・甘泉間の直道を開拓するなどして、始皇帝に重用されたが、始皇帝の死後、趙高・李斯らに妬まれ、誣告をうけ罪を被せられ、毒を仰いで死んだ。伝は『史記』卷八八・蒙恬列伝にある。

○晏駕 天子の崩御を忌んでいう語。

○羣小所構 「羣小」は、多くのつまらぬ輩。「構」は、ないことをあるように仕組む。陥れる。『後漢書』卷七〇・孔融伝に「羣小所構」の語が見える。「構」は「構」に通じる。

○横被 事実無根で讒言されることなどに言う。

○誅夷 討ち平らげる、全部殺戮すること。「誅」は罪が一門に及ぶこと、「夷」は殺が九族に及ぶこと。『太平広記』には、卷一一〇・報応九「邢懷明」に「其年並以劉湛之黨、被誅夷

（其の年並びに劉湛の党なるを以て、誅夷せらるる）（出典は唐・韋道世『法苑珠林』、卷一四八・定数三「崔圓」に「魯從僞官陳希裂等並爲誅夷（魯從の僞官陳希裂等並びに誅夷せらるる）」（出典は唐・盧肇『逸史』の例がある。

○上帝 天帝。『河東記』では、他に「蕭洞玄」（卷四四・神仙四四）、「崔紹」（卷三八五・再生一一）の二話に見える。

○勞功 働き。勞力を使う。『太平広記』はこの用例のみ。『文選』卷二七・鮑照「東武吟」の李善注に『韓非子』を引いて「而君棄之、手足胼胝、面目犁黑、有勞功者也。（而して君之を棄つれば、手足胼胝ありて、面目犁黑なり、勞功有る者なればなり）」とある。また、『全唐詩』卷八一〇・龐蘊「雜詩」に「不假坐禪持戒律、超然解脱豈勞功（坐禪を仮らずして戒律を持し、超然として解脱するに豈に勞功あらんや）」とある。また、功績をねぎらうという意味でも使用される語である。

○害民 民をそこなう。

○配守 配流して、守らせる。『太平広記』では、他に卷三三一・鬼二〇「劉洪」に一例、「吾因爲人有罪、配守此基。（吾因りて人の罪有るが為に、此の基に配守せらるる）」（出典は唐

・牛肅『紀聞』とある。寒山詩には、「少年何所愁、愁見鬢毛白。白更何所愁、愁見日逼迫。移向東岱居、配守北邙宅。何忍出此言、此言傷老客。（少年何の愁ふる所ぞ、鬢毛の白きを見るを愁ふ。白ければ更に何の愁ふる所ぞ、日の逼迫するを見るを愁ふ。移して東岱の居に向はしめ、配して北邙の宅を守らしめん。何んぞ此の言を出だすに忍びんや、此の言老客を傷ましむ）」（『全唐詩』卷八〇六）とある。

○吳嶽・吳山 五鎮の一つで、西の鎮護の山。岳山ともいう。陝西省隴山の西南。中国の古代社会にあつては、天地を天子が祀り、山川を諸侯が祀った。その山川を主管する「神」が存在するという考えは興味深い。それはあたかも四海に海を守る竜王を配属させたことなどを想起させる。

○嶽號 山岳に与えられた尊号。『唐会要』卷四七の「諸封嶽瀆」の記事に基づき、『事物起源』卷二に「五嶽號」の記載がある。「唐會要曰、垂拱四年七月一日、封嵩嶽爲神嶽大中王。

萬歲通天元年四月一日、又尊爲皇帝。神龍元年復爲王。先天二年八月二十日、又封西嶽爲金天王。開元十三年封太山爲天齊王、天寶五載正月、封中嶽爲中天王、南嶽司天王、北嶽安天王。宋朝會要曰、大中祥符元年十月十五日、詔泰山天齊王

加號仁聖天。(唐会要に曰く、垂拱四年七月一日、嵩岳を封じて神岳大中王と為す。万歳通天元年四月一日、又尊して皇帝と為す。神龍元年、復た王と為す。先天二年八月二十日、又西岳を封じて金天王と為す。開元十三年、太山を封じて天齊王と為す。天宝五載正月、中岳を封じて中天王と為し、南岳を司天王と、北嶽を安天王となす。宋朝会要に曰く、大中祥符元年十月十五日、泰山天齊王に詔して、仁聖天を加号す。)これに従えば、「嵩山」「西岳」「太(泰)山」「中岳」「北岳」が五岳とみなされている。因みに、「呉山」は、「五鎮」の一つとして、「五鎮號」の条に「隋書開皇十四年、立冀鎮霍山祠、開元禮惟祭四鎮、開寶後益霍山爲五、唐天寶十載正月二十三日、始封東鎮沂山爲東安公、南鎮會稽山爲永興公、西鎮呉山爲成德公、中鎮霍山爲應聖公、北鎮醫巫閭山爲廣寧公(隋書に開皇十四年、冀鎮霍山の祠を立つと。開元の礼惟だ四鎮を祭るのみなるも、開宝の後、霍山を益して五と為す。唐の天寶十載正月二十三日、始めて東鎮の沂山を封じて東安公と為す、南鎮會稽山を永興公と為す、西鎮呉山を成德公と為す、中鎮霍山を應聖公と為す、北鎮医巫閭山を広寧公と為す。)」としてあり、「西鎮呉山を成德公と為す」と記述されている。

『太平広記』中には、他に用例はない。因みに『唐会要』によると、後の至徳二年に、呉山は勅令によつて「呉嶽」と改称されている。

○却歸 本来は、多く官職を辞して故郷に帰ることを言う。『太平広記』中には、使用例は多く、ほとんど原義で使われている。ここでは、所属が変わること。

○華山 五嶽の一つで、西に配され、西嶽ともいう。陝西省華陽市の南。五嶽と五鎮とは、いずれも古来より信仰の対象となっている五つの山。

「五嶽」東嶽・泰山 西嶽・華山 南嶽・衡山

北嶽・恒山 中嶽・嵩山

「五鎮」東鎮・沂山 西鎮・呉山 南鎮・會稽山

北鎮・医巫閭山 中鎮・霍山

○官曹 役所、また官吏の総称。『太平広記』中に散見される。

○移便 移動。

○主管 主としてつかさどり治めること、主だつて支配すること。転じて支配者。『太平広記』では、他に卷一三四・報応三三「劉自然」(出典は後蜀・周珉『愍戒録』、卷一四九・定

数四「杜思温」（出典は唐・鍾輅『前定録』）の二例。

○人跡所稀 人が殆ど訪れない場所。「人跡所々」の用例には、

『河東記』では、他に「蕭洞玄」（卷四四・神仙四四）に一例。

ただ、こちらは「人跡所轢」とあって、逆の意味。

○寂寞 ひっそりとして淋しいさま、また、形も声も無いさま。

○小職 ひくい官職。『太平広記』中では、他に四例。

○假王 真実の王ではない、かりそめの王。『史記』卷九二・

淮陰侯列伝に「願爲假王便（願はくは仮王と爲して便せん）」、

『史記』卷四八・陳涉世家に「乃以呉叔爲假王（乃ち呉叔を

以て仮王と爲す）」、『漢書』卷八・高帝紀に「不爲假王，恐不

能安齊（仮王の爲ならず、齊を安んずる能はざるを恐るれば

なり）」とある。また、羅隱に「中元甲子以辛丑駕幸蜀四首」

其の一に、「已聞肝食思眞將、會待畋游致假王。（已に聞く肝

食して眞將を思ひ、會に畋游^{まき}を待つて仮王を致すべしと）」（『甲

乙集』卷八）とある。

○從容 ゆつたりとしたさま、くつろいださま。田中謙二「こ

とばと文学」（汲古選書、一九九三年）所収「從容考」参照。

この場合は構文上動詞と考えられるので、「しばらく寛ぎたい
と思った」の意。

○名跡 名声と業績。『太平広記』では、他に卷二二・神仙二
二「羅公遠」（出典は前蜀・杜光庭『神仙感遇伝』ほか）をは
じめとして三例。

○幽沉 静かに世に隠れる。世事を離れて静かに暮らす。

○質性 性質、資性。『太平広記』卷二六〇・嗤鄙三「李文禮」
に「唐李文禮、頓丘人也。好學、有文華、累遷至揚州司馬、

而質性遲緩、不甚精密（唐の李文禮、頓丘の人なり。學を好
み、文華有り。累遷して揚州司馬に至る。而れども質性遲緩

にして、甚しくは精密ならず。）」（出典は唐・韓琬『御史台記』
など三例ある。

○孱懦 臆病で軟弱。杜甫「石櫃閣」に「信甘孱懦嬰、不獨
凍餒迫。（信に甘んず孱懦^{せんだ}に嬰^かるを、独り凍餒^{とうだ}の迫るのみに
あらず）」とある（『杜詩詳註』卷九、『全唐詩』卷二一八）。『太
平広記』中には、他に用例を見ない。

○幸蒙 光栄にも。『太平広記』卷二五八・嗤鄙一「侯思正」
に「思正驚起、悚慙作曰、「思正死罪、實不解。幸蒙中丞見教。」

乃引上階、禮坐而問之。元忠徐就坐自若（思正驚き起ち、悚^{おそ}れ慍^つしみ乍^はどて曰く、「思正の死罪なるは、実に解せず。幸ひにも中丞の教へらるるを蒙る。」と。乃ち引きて階に上り、礼坐して之に問ふ。元忠徐ろに坐に就きて自若たり。）」（出典は唐・韓琬『御史台記』、また、『太平広記』卷三〇五・神一五「李伯禽」に、「伯禽迎于門庭、言敘云「幸蒙見録、得事高門。」再拜而坐、竟夕飲食而去。（伯禽門庭に迎へ、言敘して云ふ「幸ひにも録せらるるを蒙り、高門に事ふるを得たり。」と。再拜して坐し、竟夕飲食して去る。）」（出典は唐・陳邵『通幽記』などの用例がある。『河東記』では、他に「韋浦」（卷三四一・鬼二六）に一例。

○奉教 本来は、教えや導きを受けることを言う。『太平広記』中には、他に八例。卷三六・神仙三六「李清」（出典は唐・薛用弱『集異記』をはじめ、「謹奉教（謹んで教へを奉ぜん）」の形で使用されることが多く、計四例。

○奉慕 敬慕。『太平広記』では、他に卷八三・異人三「張佐」（出典は唐・牛僧孺『玄怪録』）に一例。

○風儀 容姿、身のこなし、風采。『太平広記』にも、卷四二・神仙二「裴老」（出典は唐・盧肇『逸史』、卷八二・異人二

「李子牟」（出典は唐・薛用弱『集異記』）など、十例以上。
○何幸ゝ 幸運にも。『太平広記』卷二七七・夢二「唐高祖」に「天理人事、昭然可知。不可固拒、天之與也。天與不取、必受其咎、無乃不可乎。高祖拜而謝曰、「弟子何幸、再煩鄭重丁寧之意、敢不敬從。（天理と人事とは、昭然として知るべし。固拒すべからず、天の与かればなり。天与かりて取らずんば、必ず其の咎を受く、乃ち可ならざる無からんや。高祖拜し謝して曰く、「弟子何の幸ひなる、再び鄭重丁寧の意を煩はす、敢へて敬從せざらんや）」（出典は『広徳神異録』、『太平広記』卷四八八・雜伝記五「鶯鶯傳」に「一昨拜辭、倏逾舊歲。長安行樂之地、觸緒牽情。何幸不忘幽微、眷念無數。鄙薄之志、無以奉酬。至于終始之盟、則固不忒（一昨拜辭し、倏^{たちま}ち旧歲を逾^こゆ。長安は行樂の地にして、緒に触れ情を牽かん。何の幸ひぞ、幽微を忘れず、眷念^{いんと}數ふ無き。鄙薄の志、以つて奉酬する無し。終始の盟^{あひみ}に至りては、則ち固^{たが}り忒はず。）」とある。

○誠有事則ゝ「誠：則ゝ」は、仮定の構文。「もし…であるならば、…だろう。」

○幸甚 光栄に思う。有り難く存じます。

○閑散 暇で用事がないこと。常見の語であるが、『太平広記』では、この一例のみ。

○効用 働いて役に立つ。また、ききめ、はたらき。

○如今 いま、現在。

○士馬 兵士と馬、兵馬。『河東記』では、他に「馬朝」（卷

三二〇・神二〇）に一例。

○處處 どこもかしこも、各所。『太平広記』中にも常見される。

○權柄 権能、権力。『太平広記』では、他に卷一六七・氣義

二「裴冕」（出典は唐・璩子温『談賓録』）に一例。

○興元 唐の府名。陝西省南鄭県。興元元年（七八四）、梁州

より府に昇格させた。治所は、南鄭（現在の漢中市）。領域は、現在の陝西省城固県以西の漢江流域。

○健兒 唐代の兵士の称。元氣の盛んな男子、また、壮士、

随侍の軍卒の名。唐代の兵士の一種で、諸軍鎮には健兒がいた。とくに辺境の軍隊で生まれ育った者には種々の優遇措置が講じられていた。おそらくこの話に出てくる「健兒」は、興元節度使のものと兵士の一派が徒党化した者と考えられる。

文中の「興元當有八百人無主健兒。」もそのことを言うのである。

ろう。『唐六典』卷五・兵部尚書参照。後に引く「太和四年…」の『旧唐書』の記事にある「官健」もこれと関わると思われる。唐初の府兵制のもとでは士兵は武器資糧は自弁であったが、次第にこれを官給に変えていったことによりこのような呼称がある。そもそも「健兒」とは、唐代辺境防備のために臨時に募集した兵士。唐初の府兵制は平時における常備軍の制度が基本であった。そのため遠征軍を組織する場合、動員可能な府兵は限られ、遠征軍は臨時編成の「行軍」によっていた。「行軍」はその都度各州の責任において募兵され、府兵が武器資糧自弁なのに対して、官給された。開元七年（七一九年）頃から「行軍」「鎮軍」には六年を任期とする健兒の制度が導入された。健兒も臨時の募兵であるが、一般の募兵が州兵であるのに対して、中央で直接召募派遣し給与を与えた者であった。開元二五年（七三七年）には長期にわたって軍鎮に住む長期健兒制が出現した。長期健兒は一切の課役を免除され、食糧及び春秋二季の衣服を支給され、家族と居住する者には田土・居宅が支給されたのである。このように軍鎮には、衣食住を国家に依存する職業軍人が登場し、辺境防備体制の変化に伴い、府兵制は完全に消滅する。この話の舞台

は、それから百年以上も後のことであることから判断すれば、こうした中央の指揮の及ばぬ辺境防備は常態化しており、土着した職業軍人が、軍閥化して半独立国家の様相を呈していたと考えられる。気賀澤保規著『府兵制の研究』（同朋舎、一九九九年）参照。

○**圖謀** 謀る。また、はかりごと。『太平広記』には、卷七二・道術二五「陸生」（出典は唐・皇甫氏『原化記』）をはじめとして、他に二例。

○**將領** 将帥に同じ。軍をひきいる將軍、軍隊のかしら。また、率い統べること。

○**奉託** お頼みする。依頼する。『太平広記』では、卷二五・神仙二五「元柳二公」（出典は十国呉・沈汾『続仙伝』）とするも、唐・裴鉞『伝奇』が正しい）をはじめとして、十例以上。

既出の「奉教」「奉慕」と同じく、「奉」の形の敬語。『河東記』では、他に「崔紹」（卷三八五・再生一一）に一例。

○**紙錢** 葬送の時、死者や神のために供える紙で作った錢。古くは玉や絹、本物の錢を用い、儀礼が終わると埋めたが、魏晋以来、錢の形に切った紙を用い、終わると焼き捨てるようになった。現在の中国においても、道教の祭礼において紙

錢を燃やして死者や神に捧げる習慣がある。唐・張籍「北邙行」に「寒食家家送紙錢、烏鵲作窠銜上樹（寒食家家紙錢を送り、烏鵲窠を作らんとして銜みて樹に上る）」（『全唐詩』卷三八二）、『宋史』卷二八一・寇準伝に「縣人皆設祭哭於路、折竹植地、挂紙錢（県人皆祭祀を設けて路に哭し、竹を折り地に植て、紙錢を挂く）」とある。『河東記』では、他に「盧佩」（卷三〇六・神一六）、「韓弁」（卷三四〇・鬼二五）、「許琛」（卷三八四・再生一〇）、「辛察」（卷三八五・再生一一）の四話に見える。

○**萬張** 一万枚の紙錢。「張」は、中国語で平面のものを数える際の量詞。

○**藉手** 相手に力添えをする、助けになること。常見の語であるが、『太平広記』中では、他に卷一六四・名賢・「于休烈」（出典は唐・璩子温『談賓録』）の一例のみ。

○**許諾** 承知する。『河東記』では、他に「崔紹」（卷三八五・再生一一）に一例。

○**霰霖** 汗の流れるさま。小雨のこと、小雨に濡れるさま。もとは『詩経』小雅「信南山」に見える言葉。左思の「呉都賦」に「流汗霰霖、而中達泥濘」（流れる汗霰霖として、中達泥濘

す」とある(『文選』卷五)、『太平広記』では、この一例のみ。

○市紙 紙を買う。「紙」は、ここでは紙銭を指す。

○太和四年… 「太和」は唐・文宗の時(八二七〜八三五)

の年号。『旧唐書』及び『新唐書』に、太和四年(八三〇)、

興元で反乱が起き、興元節度使の李絳が賊により殺され、そ

の後、興元の節度使となった温造がその賊を討った、という

話が見える。『旧唐書』卷一七下・本紀、『新唐書』卷八・本

紀、他) いまは、『旧唐書』(卷一七・本紀一七下・文宗下)

により該当する部分を見てみる。「二月丙午朔戊午興元軍亂、

節度使李絳舉家被害。判官薛齊・趙存約死之。庚申以左丞温

造爲興元節度使。(略)興元温造奏害李絳賊首丘銓・丘鑄及官

健千人並處斬訖。其親刃鋒者斬一百段、號令者三段餘並斬首

内一百首、祭李絳三十首、祭死王事官寮、其餘屍首並投於漢

江(二月丙午朔戊午、興元の軍乱る。節度使李絳家を挙げて

害を被る。判官の薛齊・趙存約之に死さる。庚申、左丞温造

を以て興元節度使と為す。(略)興元の温造奏して李絳を害せ

し賊首の丘銓・丘鑄及び官健千人並びに処斬し訖はる。其の

刃鋒に親しむ者一百段を斬る、号令せし者三段余並びに斬首

の内一百首、李絳ら三十首を祭り、王事に死する官寮を祭る、
其の余の屍首並びに漢江に投ず。」とある。太和の年号を附
す話は、『河東記』では、他に「慈恩塔院女仙」(卷六九・女
仙一四)、「馬朝」(卷三一〇・神二〇)、「韋齊休」(卷三三八
・鬼三三)、「段何」(卷三四九・鬼三四)の四話。

○李絳 唐、贊皇の人。字は深之。諡は貞。独立した伝が『旧
唐書』卷一六四、及び『新唐書』卷一五二に見える。李絳(李
三。李僕射)にまつわる唐代の小説関連の資料は多く、『唐五
代五十二種筆記小説人名索引』によると、二十七条ある。い
ま、『太平広記』所引を一渡り見てみると、以下のような人物
像として捉えられていたことが判明する。憲宗の折りに立碑
を戒めた話(卷一六四・名賢)、貞元中、李元賓・韓愈・李絳
・崔群は同年の進士であり、ともに梁肅の門下に学んだ。梁
肅は、李元賓・韓愈は文学で名をはせ、李絳・崔群は「文と
行いと相契へり、他日皆大名を振へり。然れば二君子は位人
臣を極む。」とその人物を喝破した。はたして李絳・崔群はそ
の通りになった話(卷一七〇・知人二)、李絳が郷薦をもとめ
た折り、樊沢が節度使であり、張正甫が判官であり、李絳に
前途ありと見込んで、他の者の費用を李絳ひとりに与えた。

李絳はこの恩に感じて十年ならずして出世した話（巻一七九・貢拳二）などがある。

○遇害 『河東記』では、「韓弁」（巻三四〇・鬼二五）に一例。

○温造 唐、河内の人（七七六〜八三五）。字は簡輿。独立した伝が『旧唐書』巻一六五に見える。『唐五代五十二種筆記小説人名索引』によると、『太平広記』には四条に名前が見えるが、その中で本話柄と関係すると思われる「温造」（巻一九〇・将帥二）のあらすじを挙げておく。憲宗治世（元和元年八〇六〜元和一五年八二〇）、戎羯が反乱を起こし軍を派遣して鎮圧に当たらせようとした。ところが派遣する段になって内部に謀反が起き、收拾がつかなかった。憲宗は深く憂えて京兆尹であった温造を抜擢して、鎮圧に必要な出費を尋ねたところ、温造は一人の兵も軍備をも必要ないと答える。儒生一人で反乱の地に到ると、反乱軍は朝廷はその罪を問うことはないと判断して喜んだ。しかし、反乱の兵士たちは武器を手放すことはなく、温造もそれを咎めなかった。ある日、ポロの競技場に音楽を演奏する会場（宴とするテキストもあり）を設営した。兵士たちはこぞってその会場に武器を携えてや

つてきた。会場には長い縄を用意しており、兵士たちはそのロープに武器を掛けて飲食をした。飲食たけなわになり、太鼓の響きがするとロープは空高く引き上げられ、兵士たちはなすすべなく斬り殺されてしまった。五千人皆殺しにされ生存者はいなかった。南梁ではこれより謀反を起こそうとする者は、絶えていなかった。私（この話を伝えた者）は、二十年前にここに勤めており、古者からはつきりと聞いていたのでこの話を記すことにする（出典は後晋・王仁裕『王氏見聞集』）。この話により、対反乱軍に対して勝利した温造の知略ぶりが窺われる。その他に、温造の死にまつわる話が、「温造」（巻一四四・徴応一〇）に伝わる（出典は唐・張誥『宣室志』）。

○凶黨 叛逆の徒。また、ならずもの、無頼の徒。常見の語であるが、『太平広記』では、他に巻一二〇・報応一九「張裨」（出典は北斉・顔之推『還冤記』）の一例のみ。

【参考】

この物語は、大木の元で眠った折に不思議な人物に出会い、教示や予言を得て、その指示に基づき行動するという基本的

なモチーフをもつ。「淳于芬」一名「南柯太守伝」（巻四七五）の系統に属するものであり、『裴鉶伝奇』にも「江叟」（巻四一六）などの類話がある。また、主人公が夢か現かわからない状態の中で不思議な人物（死者・異世界の住人、もしくは神と思われるもの）と出会うという、『河東記』中の「劉渢」や「馬朝」「韓弁」などの話と共通するモチーフといえる。

これらの話と「王錡」で異なるところは、主人公の出会い、不思議な人物が、蒙恬という、歴史上実在した人物であり、しかも彼が山を管理する守護神のような存在となっていることである。

この物語の中で蒙恬自身は、長城築城における働きと、その労役で民を害したことを罪とされ、天帝により呉岳へ配置されたと語っている。五鎮の一つでもある権威ある呉岳の守りとして「王」の称号を得るのも、功罪相半ばする。人は死後、天帝にその生前の行いを断罪され、毀誉褒貶があつて、神としての役職につくと考えられていたようである。面白いのは、蒙恬が配置された後、「嶽職」が華山に移り、閑職となつてしまった、というところである。死後に与えられ、配置される役職や機関は絶対的なものではなく、現実と同じよう

に異動があるようだ。これらのことから、当時の人々が、死後の世界にも現世と同じような価値観を抱いていたことがわかる。

したがって、死後の世界でも、閑職に追いやられた蒙恬は、健児八百の亡霊を配下として収めるために王錡に紙銭を焚くように依頼し、それと呼応するように末尾に事実が記されている。

この世のものではない、おそらくは神のような存在となっている蒙恬には、これから起こる事が予見できる能力があるようだが、また、呉山の守護神である蒙恬が、なぜ主人公・王錡のことを以前から知っていたのかは、この物語の中では語られていない。しかし、そこからは、神が人間の営みをどこからか見ており、その行いによつては、時に手助けをしてくれると考えられていたことが想像できる。この話が「奇」として伝えられたポイントは、夢に神らしき不思議な人物、それも古の蒙恬だという者が現れ、未来を予言し、その通りになったことが挙げられるだろう。しかもその予言した出来事が、正史にも記録されている事実であることは、「小説」が元来、歴史を補完する役割を担うものであったことを思い起

こさせる。

また一方、この話は李絳と温造の歴史上の話に付随する逸話として伝承されてきた可能性を窺わせるものである。最後の温造の凶党八百の討伐は史実であり、歴史上かなり凄惨な出来事として喧伝されていたと思われる、各地で軍閥化した者たちの反乱が勃発していた当時の知られた話であった。この事件は、温造の果敢な攻撃により鎮圧された。

温造には伝奇文の『瞿童述』一卷（『全唐文』卷七三〇、一名『瞿柏庭記』）が伝わり、小説の伝承に近い環境にあったことは指摘できる。

（赤井益久）